
桜サク夏

綾瀬タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜サク夏

【Nコード】

N1132C

【作者名】

綾瀬タカ

【あらすじ】

「桜」と「椿」は双子の姉妹。2人は別の高校に通っているが、ある日からお互いの高校を入れ替わることになった！！桜は椿の振りをして学校に行くが、生徒会や部活の助っ人、男友達など、さまざまな問題に直面する。ひとりになりたくて見つけた立ち入り禁止の屋上。そこにいたのは……？！やがてそこは、桜の大切な秘密の場所となる。自分の学校生活と全く正反対の生活の戸惑いながら、初恋を育てていく桜の恋は花を咲かせるのか？

1 桜と椿（前書き）

毎日更新です。更新時間は午前0時ごろ。

更新が遅れる場合、休みの場合のみ、前書きにてお知らせします。

1 桜と椿

「あれ、椿じゃん」

その声に振り向くと、知らない男の子が立っていた。

日曜日の午後。梅雨が明けた空はすっきりと晴れて、爽快なブルーが広がっていた。

最近はず雨が続けていたから、久しぶりに買い物でも行こう。そういえば夏物の服をまだ買ってなかったな、と思い、家のあるところから3駅離れた街に来た。高校と逆方向にある、比較的都会な街。思えばその選択が、いけなかった。

ちようど思い描いていた通りのワンピースを買って、その他にもいろいろ買って、私は駅に向かっていった。そして切符を買おうとしたそのとき、後ろに並んでいた男の子が、声を掛けてきたのだ。

「お前、この辺に住んでるんだっけ？ それともこれから帰るの？」
何の躊躇いもなく、私を「お前」呼ばわりする男の子。初めから思っていた。私は彼のことを、まったく知らないのだ。

「ああ、でも椿は電車通学だったよな。じゃあここに住んでるんじゃないか」

何度も言っているように、この男の子はまったく知らない。だけど彼が私に向ける「椿」には心当たりがあったので、私は彼のほうを振り返って、いつものように答えた。

「うん。買い物してて、これから帰るの。じゃあまた明日ね」

そう。“いつものように”、椿になりきってしまった。

* * *

「ねえ椿。今日学校の友達みたいな人に会ったよ」

「へえ？」

その日の夜、私と椿はリビングにいた。食事を終わって、ソファで、テレビを見ている。

「誰？」

「背の高い男の子。椿のこと、『お前』って呼んでた。電車通学だったよな、って」

「ふーん、じゃあ同じクラスかなあ」

「何か親しそうだったけど」

椿は同じクラスの男子を思い出しているらしく、「あ、あいつ？」とか「佐田かなあ」とか、言っている。

「ね、どんな奴だった？」

「え？」

「顔とか、体格とか」

「そんなの、分かんないよ」

だってあれは、一瞬の出来事だった。声を掛けられて振り向いたときしか、彼の顔なんて見ていなかった。

「なくんだ。まあいいや。明日になったら分かるだろうし」

そうだ。もし彼が椿に何か言っても、明日は椿が上手く話を合わせしてくれる。

「あ、そういえばあたしも昨日、桜に間違われたんだった」

「え、誰かな」

これがいつもの私たち。これが私と椿。

私たちが双子ということは、あまり知られていない。

* * *

私たちは春に生まれた。花好きの母は、姉に「椿」、妹に「桜」とつけた。双子の姉妹は二卵性。顔は見分けがつかないくらいそっくりで、だけど性格ははっきりと分かれている。

「桜、行くよっ」

「待ってよ、椿」

これが、分かりやすいところの私たちの関係性。

1年前、高校にあがるときにこの町に引っ越したばかりだから、私たちが双子ということは、まだ、ごく近所の人しか知らない。

別に知られてもいいのだけれど、過去の経験上、私たちは双子だという理由で、一緒にされたり、比べられたりする。私と椿はお互いに依存しているくせに、2人をひとつにまとめられることを、嫌っている。

私は私。椿は椿。私たちはそれぞれ、ひとりの人間なんだ。

“同じじゃない”ことを分かってくれる人なんて、滅多にいない。だから私たちは別々の高校に通い、双子を隠す。分かってほしいと思うより、分かってもらうことを面倒に思うからだ。

私は私。だけど、私は時に、椿になる。

街で誰かに会ったとき、私は「椿」、椿は「桜」と間違われる。そのときも、私たちはお互いになりきろうと決めている。あとでそのことを報告し合って、ちゃんと話が合わせられるようにする。そのほうが、双子を知られるよりも簡単で、面倒ではないのだ。

私は椿が好き。椿も私が好き。

だけど、双子は嫌い。

2 昨日の彼

学校から帰ったら椿はまだいなくて、どうしたのかなと思いつつ、私は夕食の準備をしていた。

父はサラリーマン。大企業の結構高い地位にいて、生活に苦労したことはない。出張が多くて、今は確か1ヶ月ほど、ニューヨークに行っている。仕事ばかりだけど、家族を大切に想ってくれる、優しい人。

母はホームヘルパーの会社を経営していて、父同様、仕事人間。でも家にはちゃんと帰ってくるし、家事だってしてくれる。私が食事の支度をするのは、どうしても母が遅くなってしまう日だけ。「あんたたちはまだ学生なんだから、学校生活を楽しめばいいのよ」と言ってくれる、厳しいけれど、愛情のある人。

「ただいまー!!!」

「おかえり、椿」

椿は制服のままリビングに入ってきて、キッチンへと踏み込んでくる。

「今日は桜が作ってるの?」

「お母さん、今日は月一恒例の反省会だから」

「ああ、そっかあ」

椿は冷蔵庫を開けると、定位置にあるミネラルウォーターを取り出した。学校から帰った椿のいつもの行動だ。

「あ、ねえ。そういえば昨日、言ってたじゃない?」

制服を着替えた椿は、ソファに座って、テレビをつけた。椿はその日にあったニュースをチェックするのが日課で、いつもテレビに向かって何やらぶつぶつ言っている。

「椿、あたしに言ってる?」

「うん。昨日、あたしの友達に会ったって言ってたじゃない。あれ、分かったわ」

椿はそう言って、同じクラスの男子だった、と続けた。

「あ、やっぱり」

「いりきなつ入来夏っていうの。クラスの盛り上げ役っていうか、まとめ役っていうか。普段はバカみたいに騒ぐのが好きな、筋肉バカなだけなんだけど」

「椿、『バカ』って言いすぎ」

すると椿は、カウンター越しにキッチンに立つ私のほうを振り向いて、言った。

「そいつがね、『お前って歳の近い姉か妹いたっけ』って、言ってきたの」

「え？」

「あたしはてっきり、『お前昨日会ったよな』とか言われるんだと思ってたんだけど、びっくりしちゃった。まあ、昨日会ったのはあたしってことにしといたけど」

椿は「入来夏」のことを、どう思っていたのだろうか。感心したように頬杖をついて、「あいつってバカなくせに意外と見る目あるのかも」と、言った。

「へえ……すごいね。今まで誰もそんなこと言ってこなかったのに」「でしょ?! それでひとつ、面白いこと思いついたんだけど!!」

そう言って椿は、とうとうテレビに背を向けて、私に言った。

「あたしたち、入れ替わってみない?!」

3 入れ替わり大作戦

「入れ替わるって、どういうこと？」

椿はいつも突拍子もなく思いつきで話すことがあるけれど、そのだいたいは、私にだけは伝わっていた。両親が分からないと言ったことも私にだけは分かって、私から説明することもあった。

だけど今回だけは、まったく、椿のことが分からない。

「だからあ、あたしが桜で、桜があたしになるのよ」

そうやって椿が説明を加えても、分からなかった。

「分からないよ、椿。あたしが椿で椿があたしって、どうなるの？」
手早く野菜を刻んでいた手は包丁を持ったまま、さっきから中に浮いて、止まっている。

「だからあ、」

椿は言った。お互いを装ってお互いの学校に通うのよ、と。

「何でそんなことするの？」

「だって、面白そうじゃない」

「気づかれたらどうするの。今までは一瞬の出来事だったから平気だったけど、学校に1日いるとなると、クラスの人とか友達とか、覚えなきゃいけないし。あたしと椿は性格だって違うんだから、何時間も一緒にいたらばれるよ」

「大丈夫だって！！ あたしたち記憶力いいし、顔が同じなのに別人だなんて誰も思わないよ。みんなただの高校生なんだから」

あたしたちだってただの高校生じゃない、と言おうとしたけれど、椿はそれを聞く前に、ひとり、楽しそうに入れ替わりを想像した。そのうち妙に自信を持って、「うっわあ、楽しそう！！」と、私の肩をバシバシ叩いた。中学時代、バレー部のエースとして鍛えたアタックが私の肩を押し潰していつて、包丁を持つ手は耐え切れず、カチャン、と、床に突き刺さった。

「あっ、ぶないなあ」

「椿、力入れすぎ!! 肩痛い!!」

「ああ、ごめんごめんっ」

椿は顔の前に両手を合わせると、ウィンクをして、「で、どう?」
と言った。

「椿、何考えてるの? 別の高校に通おうって、椿が言い出したことじゃない」

「確かにあたしたちは、双子だって、人に知られたくないけど。だけど、あたしたちは双子なんかもん。それを生かして楽しみたいじゃない」

双子っていうのを嫌うんじゃないって、双子でよかったと思いたいのと、椿は言っているような気がした。

それには賛成だった。私だって椿と双子だってことを、もっと喜びたいと、思っていたから。

「分かった。椿の提案に乗ってあげる」

「本当?!」

「あたしも、自分の学校には飽きてきたところだし。椿の言うとおり、楽しくなるんなら1日くらい替わってもいい」

もしかしたら自分の学校にはない楽しさが、見つかるかもしれない。たった1日だけど、お気に入りの場所ができるかもしれないし。

「よし!! じゃあ早速部屋から学校の見取り図取って来るね!!」

「え?!」

「明日はクラス写真をこっそり持ってくるから。入れ替わり大作戦、あさって決行!!」

「え、あさって?! うそ!!」

床に包丁が突き刺さった。

4 準備中

その日は夜中2時まで学校の見取り図とにらめっこ。翌日学校から帰ると、「持ってきたよ!!」と、椿がクラスの集合写真をテーブルに広げた。

「待ってよ椿。なんでこんなに写真が多いの?」

「だってうちの学校1学年8クラスだから、3年併せて24クラスあるんだもん」

椿は24枚のクラス写真を、バラバラと両手で伸ばす。1年2年3年、と、クラスの順番を分けているようだ。

「そうじゃなくて、全校生徒覚える必要なんてないじゃない。同じクラスの人だけでいいんじゃないの?」

「あつ、言ってなかったっけ? あたし生徒会に入ってるの。だから後輩も先輩も知り合いが多くてさ。他にもまあ、いろいろやるから、結構多いんだな、これが」

「嘘でしょ……」

「だいじょぶだって!! 全国模試上位常連の桜ならきつとできるから!!」

「無理無理無理!!」

人の顔と名前、呼び方を一致させるのなんて、どんな頭の良い人だって完璧にできないと思う。写真の写りが良い人、悪い人がいるだろうから。

「椿は何でそんなに余裕そうなの」

確かに私が持ってきたクラス写真は1枚だけ。それでも40人近くいるし、昨年全国大会にも出場した剣道部の部員は男女合わせて36人。椿は頭が良いけれど、暗記系は苦手なほうだったはずだ。

「うちの学校、中高一貫だから校舎が広いんだよ。もちろん別れてるけど、間違って中学の校舎に入っちゃうことだってあるんだから」「知ってるよ。あたしはもう桜の学校の見取り図、覚えたもん」

その言葉は本当だったことは、明日になって分かるのだった。

＊ ＊ ＊

「あたしの席は窓際一番後ろなの。明日の1限は現代文だからクラス移動ないし、退屈だからさ、じっくり観察でもしてなよ」

「そんな余裕ないと思うけどな」

「だいじょぶだって!!」

さっきから椿は根拠のない「大丈夫」を、何度、繰り返しただろうか。その度に私が不安になっていることには、気づいているのだろうか。

「あとはクラスの奴だけね」

一通り、先輩後輩との位置関係を覚えたあと、椿は「2年1組」の写真を目の前に突き出した。

「椿は誰とよく一緒にいるの？」

「んゝ特に決まってるない。男子も女子も、みんな仲良いんだ、うちのクラス」

写真には緊張感がなく、皆、とても楽しそうに笑っていた。私のクラスにはない一体感。少しだけ、羨ましく思えた。

「それでコイツが、入来夏」

椿は写真を指差した。その先には、この前一瞬だけ会った、あの彼の姿があった。

「あ、そういえばこんな人だったかも」

ふっ、と振り返ったときにぶつかった視線。少しだけ高い位置にある広い肩も、明るいけど低い声も。もしかしたら私は、ちゃんと心の中で覚えていたのかもしれない。

「本当はね、夏を試したいんだ」

と、椿は言った。

「男子の信頼が厚くて、女子からも好かれてる。単純な奴なんだけど、あたしと桜の違いが分かったのって、あいつだけだからさ。もしかしたらまた気づくかなあって」

「気づかれたら？」

「しらばっくれるだけよ」

椿はプイツと顔を背けると、入来夏的话题から離れた。

——しらばっくれなきゃいけないのって、あたしの役目じゃない。

このときはまだ、椿と入来夏の間どんな関係があるかなんて、考えようとしなかった。

5 作戦開始!!

入れ替わり大作戦決行日の朝。

「桜〜!!! 制服これでいい?」

「えっと……、あっ!!! 椿、リボン忘れてる」
「どこ〜?」

「クローゼットの左!!!」

私こと桜の登校時間まで、あと5分。桜に扮した椿は、ドタドタと私の部屋を駆け回っている。

私たちは昨日、入れ替わったときの様々な場合を想定して、お互いに教え合った。例えば、椿はお昼はクラスで、大勢で机を寄せ合って食べているとか、桜は友達がいらないのではないけれど、何かとひとりで行動することが多い、とか。これで完璧、と思った2人。揃って、制服の着こなしについては教えるのを忘れていた。

その結果が、これ。

「椿、リボンは3つあるでしょ。どれでもいいから!!!」

「うん。今日は緑にする〜、っと、そろそろ出なきゃ」

「いってらっしゃい。あたしは10分後に出るから」

「了解。じゃ、ね〜」

椿が家を出た。

ああ、本当に桜として行ってしまったのか。往生際の悪い心が、まだ納得できずに呟いていた。

＊ ＊ ＊

椿が言うには、7時40分に家を出て、57分発の電車に乗る。駅から徒歩10分のところに学校があって、20分過ぎには教室に着く。それで30分からのホームルームに余裕で間に合う、らしい。だけど今、私は、走っている。時刻はすでに8時25分。学校はもう見えているけれど、校門まであと100メートルはあって、さらに「2-1」は3階の一番奥。

家を出て5分ほど経ったところ、携帯が鳴った。椿からだ。

「桜ごめん!!」

開口一番に、椿は言った。どうしたの、と私が返そうとしたところ、椿はさらに、続けた。

「ネクタイしてる？ してないよね。うちの学校、ネクタイ常備なの。忘れたらペナルティなんだ。あたしの部屋のクローゼットの左に入ってるから、お願い!!」

椿はそれだけ言って、電話を切った。時間的に、どうやら電車を途中で降りて掛けてきたみたいだった。

「お願いって、これから戻れって言うの?!」

きっとすぐに電話を切ったのは急いではなくて、私に有無を言わせないようにしたんだと思う。電話がまだ繋がっていたら、私だって椿に文句を言うし、取りになんて戻らないと、きっぱり言える。

「ずるいよ、椿」

私は走って、今来た道を全速力で戻っていった。

「おはよう椿。どうしたの、ギリギリじゃん。まだコッシー来てな

いよ。良かったね」

8時28分に3階に着いて、そのままトイレに駆け込み、苦しい胸の鼓動を抑え、メイクと髪を整え直し、チャイムと同時に平静を装って教室に入った。

「ちよつと、電車に乗り遅れちゃって」

声を掛けてきたのは、前の席の乃李^{のり}。椿いわく、「あたしのことがすっごい好き」な、女の子。

「椿、CD持って来てやったよ。ほら」

「あ、ありがと喬^{たかし}。返すの来週でいい？」

「またそのままパクるつもりじゃねえの？」

「ちゃんと返すって」

「気長に待っとくわ」

よく遊ぶ男子のひとり、喬との会話はこれでいい。椿はこうも話した。1か月前に喬に告白されて断った。良い友達のままでいたいから、気を持たせるようなことは言ってはいけないのだ、と。つまり喬とは、重い空気を作ってはいけない。軽い会話を親しげにするのがちよつどいい距離なのだ。

「ホームルーム始めるぞ」

そのうち教室に入ってきたのは、担任の越丘先生。27歳のイケメンで生徒受けも良く、コッシーの愛称で親しまれている。担当教科は英語。

——よし、何とか乗り切れそう。

走ってきたことで、かえって余計なことを考えて緊張する暇がなかった。頭の中はぐるぐる、昨日必死に暗記したクラス名簿がフル回転している。

ホームルーム中、私は変にきよろきよろすることもなく、机と頬を杖で結び、気だるそうに前を向いていた。いつもの椿のクセだ。

私は椿だった。なりきっていた。いや、私は、“椿だった”。

なのに、なぜだろう。さっきから一瞬の逸らしもない視線が、背中に、私に突き刺さっている。

6 ターコイズブルー

12時30分から1時20分までの昼休み。どこに行くの、という乃李の言葉をさらっとかわして、私はひとり、屋上にいた。過去に飛び降り騒動があったという屋上は立ち入り禁止になっていた、だけど、鍵がかかっていない。たまにひとりで来るのだと、椿が言っていた。

「やっぱりひとりのほうが楽」

柵にもたれて座り、見上げると、爽快なブルーの空。お気に入り
のネックレスの石は、確かこんな色をしていた。去年、16歳の誕生日にお揃いで買った、幸運を呼ぶというターコイズブルーのネックレスが。

* * *

午前中の授業は緊張と闘っていた。それは、今日という日が12日だったせいだ。

「じゃあ今のところ、12番」

1限の現代文で、早速12番が指名された。出席番号12番。“私”は、13番。

セーフ。1番違いで、運悪く入れ替わった日に当たってしまうところだった。今日はなるべく、目立つようなことはしたくない。

それなのに。

「12番は、弥代^{やしろ}だな」

出席番号12番、弥代椿。そう、“椿”は、12番だった。

それが4限まで続いて、私は常に、椿でいなければならなかった。一瞬でさえも、気を抜くことが、できなかったのだ。

「穴はあとから開いてくるのね」

言っていなかったことも、知らなかったことも、たくさんあった。きつと椿も今ごろ、私の学校生活の新たな一面を目の当たりにしているだろう。

私が椿の部活について知ったのも、ついさっき、昼休みに入る直前のことだった。

「椿！！ 今日さ、剣道部の助っ人来てくれない？！」

お弁当を食べようと、机を合わせているところだった。廊下から叫んだ女の人は、3年生の真紀さん。生徒会副会長をしていて、剣道部の女子主将。

「え？ 助っ人ですか？」

真紀さんの前に立って、私は言った。

「うん。もしかしてもう他の部活から頼まれた？」

「何をですか？」

「何って、いつものことじゃない。助っ人頼まれるのなんて」

「助っ人……」

「先週来てもらったばかりでしょ。もう忘れちゃったの？ とりあえず放課後、道場に来てね」

真紀さんは肩をポン、と叩き、3年棟に戻っていった。

「椿、今日は剣道部？ 昨日はバスケ部だったよね」

6つほど机が合わさったところで、私の座るスペースが空いている。乃李と喬の間。そこに置かれたお弁当を掴むと、私は教室を出た。

「椿？ どこ行くの？」

「ごめん、生徒会の仕事忘れてた。行ってくるね」

そして立ち入り禁止の屋上へと、私は向かったのだった。

＊ ＊ ＊

「あたしね、高校ではバレーやらないの。楽しかったけど、他にもやりたいことはいっぱいあるから。部活には入らない」

そういえば高校について話したのは、それが最後だったような気がする。家ではなかなか、私も椿も、お互いの高校生活のことを話そうとしなかった。何がいけないとかはないけれど、ただ、何となく。たぶんそれは、私たちの間にそれぞれ別々の空間があるということ、を、改めて知りたくなかったからかもしれない。

こうして入れ替わりだっけしなれば、今さらそれを、思い知ることでもなかったのに。

――椿の高校生活って、あたしと全然違うんだ。

生徒会、部活の助っ人、お弁当と一緒に食べる仲間。私は、違う。任命制の生徒会には早々と断って、ひとつの部活に所属し、お弁当はひとり。学校でクールに思われている私は何でもひとりですることが多く、友達とベタベタ、連れ添いあうのに慣れていない。

「疲れた……」

ターコイズの空を眺めて、胸に空気を吸い込んだ。胸元にはターコイズのネックレスが、キラリと光っている。

そこに太陽が反射して、一筋の光が、彼を差した。

「何してんの、椿」

駅で出会った彼。授業中ずっと、私を見ていた彼。

入来夏。

7 屋上の空（前書き）

やっと、初めて桜と夏の絡みが入ります。

7 屋上の空

「椿。お前、生徒会の仕事じゃなかったの」

そういえば彼は、さっき6つの机を囲んだ中にいた男子のひとり。その彼がなぜここにいるのかは分からないけれど、空を仰ぐ私の前に立って、私を見下ろしている。

「入来、夏……」

彼だった。クラス写真よりも少しだけ髪が伸びて、着崩した制服とネクタイ。野球部に所属しているという彼の、初めて会ったときよりも少しだけ、日に焼けた肌。

「フルネーム呼び捨て？ 何で」

彼は声に出して笑い、頬を緩ませる。

「何でこんなところにいんの」

「……そっちこそ」

夏、と呼ぶのは気が引けて、私は思わず言葉を濁した。

「俺は、ここにはよく来てる」

「どうして？」

「どうして、って、別に、理由なんてないけど。ただ、ここは開放的だろ。空に手が届くような気がして、好きなんだ」

そう言って手のひらを高くかざした彼は、私の隣に腰を下ろした。どうして隣に座るの、そう聞いたら、別に理由なんてない、という答えが返った。そのぶっきらぼうさは嫌いじゃないと、思った。

「あたしは……。あたしも、同じかも。あそこは窮屈だから」

「あそこって、教室？」

私は、答えなかった。肯定したくなかったし、否定もできなかった。

しん、として、風が流れる。夏が近いから暖かく、ふわふわとした風。髪の毛が舞い、揺れる。

「椿」

不意に彼が呼んで、私は隣を向いた。その瞬間びゅうっと風が強く巻き起こって、薄くリップを塗った唇に、髪が一筋、触れた。

「お前、椿？」

そう言って彼は、唇にかかった私の髪を、するつと解いた。

＊ ＊ ＊

——言ってしまうのか。椿、やっぱりこの人には気づかれてしま
うよ。

そう思って、口を開きかけた瞬間、

「しらばっくれるだけよ」

と、椿の声が、聞こえたような気がした。

「……夏、急に何言い出すの。あたしが椿じゃなきゃ、誰が椿なの
よ」

「そうだな。分かってるんだけどさ、何か、今日の椿はいつもと
違うような気がする」

「もしかして、授業中ずっと見てたのも、そのせい？」

「やべ、気づかれてた？」

「あんなまっすぐに見られてたら気になるわよ。夏、あたしのこと
が好きなのかと思った」

「ぼっ、か。そんな訳ないだろ」

「ちよっと、何それ！！」

これでいい。夏は単純だから、すぐに信用する。5限は選択授業。6限は体育。今をうまくやり過ごせば、夏の視線を気にする必要もない。

あとは、人の名前を忘れないようにするだけ。そうすれば、私は「椿」から解放される。

どうして夏は私に気づくのだろう。どうして私は夏を、こんなに気にしてしまうのだろう。

それさえ、考えなくなる時が来る。

8 放課後

何度屋上に行ってしまったおうと考えたか分からない。友達付き合いはこんなに難しいものだっただろうか。

あのあと夏は教室に戻っていき、私は昼休みを屋上で過ごした。それまでは良かったのだが……

5限の選択授業では、

「あっ椿、おかえり。次選択一緒だよ」

「椿、ピアノ練習してきた？ あたしまた合格貰えなかった」

6限の体育、バスケットでは、

「椿、一緒にチームだね！！」

「椿パス！！」

「やったー！！ 椿のおかげで全勝だね」

と、ひっきりなしに女子が周りを囲んで、嬉しそうに私に話し掛けるのだ。それだけでも十分疲れるのに、さらに、私はそれがいつもの光景だと暗示をかけて、彼女たちと同じように、明るく振舞わなければならなかった。

早く家に帰りたい。そう思ったのは、ようやく長い1日の授業をすべて終えて、ホームルームを迎えたとき。やっと終わった、と、本気で思っていた。

ホームルームのあと、さっさとこの場を去ってしまったおうと、私は鞆に教科書を詰めることもせず、席を立った。誰かがまた話し掛けてくる前に、桜に戻ってしまおうと。だけど、こういうときに限って席は窓際。廊下から一番離れていて、さらに砂糖に集るアリのような、ごろつとした集団の固まりが、私の行く手を阻んでいる。彼女たちの前をどうやって過ぎようか。こうなったら正面突破しかない、決めた。

「じゃあね、また明日」

そう言って誰の返事も聞こうとせずに、私は廊下に向かっていった。

バイバイ、と返す子もいれば、もう行っちゃうの？　と言う子もいた。「うん、行っちゃうよ」。そうして私は固まりを飛び越えることができた。

だけどそこで、乃李が言った。「剣道部、頑張ってね」と。

足が、凍りついたように止まってしまった。そうだった。私にはまだ、椿としてやらなければいけないことが残っていた。

「放課後、道場に来てね」

確かに真紀さんはそう言った。

* * *

この学校はスポーツを積極的に行っているらしい。グラウンドは広くて、野球部とサッカー部、ラグビー部が活動している。テニスコートは校舎の隣にあって、陸上部は陸上競技場を貸し切っているらしい。さらに驚いたのは、2つある体育館のほかに、柔道、剣道、空手、弓道の、専用の道場があるのだった。

なぜそれを知ることになったのか。それは、剣道部の道場が分からなくて、学校をほぼ一周したからだ。実は、椿に見せられた見取り図で、体育館以外はどうせ必要ないだろうと、覚えることをしなかった。誰かに聞くわけにもいかず、私は、道場をひとつひとつ周る羽目になってしまったのだ。

「すいません、遅くなりました」

そこが剣道部だと分かったのは、横一列に並ぶ道場の最後だったからだということと、あまりに時間を掛けすぎて部活が始まってしまい、パーン、という竹刀の音が、そこから聞こえてきたからだだった。

「あゝっ!! 椿、遅いよ。何してたの」

「ごめんなさい」

迷っちゃって、と言いきうになつて、思わず俯いて口元を隠す。「うちらはもう準備運動終わっちゃったから、着替えたら椿なりに軽く体ほぐしておいて。もうすぐ来るみたいだから、それまでに支度してね」

と、真紀さんは更衣室を指差した。

「え? 来るって、誰がですか?」

「誰って、練習試合の相手校に決まつてるじゃない。先週とは違う高校なんだけどね、ここもなかなか強い。3月の都大会で準優勝したところ」

真紀さんはすでに勝ち誇つたような顔をして、「ま、優勝はうちだったけど」と、言った。

「由美がさ、まだ足の捻挫治らないのよ。2週間後の関東大会は大丈夫だって言ってるんだけど。だから椿には悪いけど、2週続けてうちの部員のフリしてもらおうってね。椿、大体のスポーツは軽くなすし、助っ人で入ったバレー部を都大会優勝に導いたエースだもん」

そうだ。椿は中学時代、全国大会に出場し、得点王になったほどの実力。チームはベスト8止まりだったのに、椿のところにはバレーの名門校からのスカウトがたくさん来ていた。結局それらを全部断って、バレーだけの人生は嫌、と、引越を機にバレー漬けの毎日から自身を解放していたけれど。

——椿は本当に、高校では自由奔放に生活しているんだ。

そう思ったら何だかすごく、ものすごく椿が羨ましくなつて、私はあと少ない“椿”を楽しもうと、更衣室へと向かっていった。

9 剣道

弥代椿は有名だった。整った顔立ちに、身長165cmのスラリとしたメリハリのある身体。そこそこ頭も良く（本気を出せば全国レベルだが）、運動神経もいい（本気を出せば全国レベルだが）。生徒会では書記、1年のころは文化祭の実行委員もしていた。人当たりも良く、先生からの評判もいい。

弥代椿は有名だった。

* * *

いつのまにか人だかりができていた。気づいたのは団体戦の最中。私は試合が終わって、もうすぐ夏になるうという日の蒸し暑さに耐え切れず、面を取ったところだった。

「わっ！！ 何、この人たち」

面を取って広がった視界には、まず目の前の道場入り口に溢れるほどの人、左右の扉からも、部活中らしい人たちが大勢いた。

「弥代さん、今気づいたの？ さっきからいっぱいいたじゃない」

「え、全然気づきませんでした。でも、どうしてこんなに？」

もしかしたらこの剣道部は、全国でも指折りの部なのだろうか。

真紀さんの言うとおり、都大会1位の實力は、確かにあると思う。

私の前に試合を終えた剣道部の3年生、佐伯さんは小さく笑って、言った。

「あはは。みんな弥代さんを見に来たんじゃない。前から有名だったけど、先週の練習試合のとき、弥代さん助っ人なのに全勝したんだもん」

「そうだったんですか？」

「え？」

「あ……いえ。それでこんなに人が」

「今日でまた人気者になるよ。先週よりもなんだか強くなったみたい。ねえ、本気で剣道部に入らない？ 弥代さんがいれば全国でも

イイ線いくと思うんだよね」

「いや、えっと……。そう言ってもらえるのは嬉しいんですけど、いろいろやりたいことがあるので」

「そうかあ。そうだよ、他の部活の誘いも断ってるんだもんね」
そう言って佐伯さんは、目の前の試合の応援を始めた。

——椿、全勝だったんだ。

私と椿は、小学1年生のころ、同じ剣道教室に通い始めた。一緒に練習して、一緒に試合に出た。時には決勝を、2人で戦うこともあった。

だけど中学に上がるとき、椿は剣道を辞めた。理由はいつもと同じ。「他にもやりたいことがいっぱいあるから」だった。

私はひとり、剣道部に入った。高校で椿と別々になった今も、剣道部に所属している。

それは、なぜだったのだろうか。ふと、考える。私はそこまで、剣道をやりたかっただろうか。

確かに剣道は楽しいけれど。強くなるために練習するのは、苦にならないけれど。

だけど、それだけではなくて。

何よりも、私は――。

私はスッ、と立ち上がり、不思議そうに見上げた佐伯さんに、言った。

「ごめんなさい。ちょっと抜けます」

「え？ 弥代さん？」

立ち上がってスタスタと、袴を引きずっていく私に、佐伯さんが声を掛けていた。それを背に受けながら、私は早足で更衣室に向かった。さっき着替えるときに見つけた、更衣室の窓からの抜け道。2mほどの高さを飛び越えれば、道場の裏側に、人だかりに気づかれずに行けるのだ。

「よし」

防具が並ぶ、天井まである棚に片足を掛ける。勢いをつけてもう片足を振り上げると、思ったよりも簡単に、窓の柵に飛び乗ることができた。ただ、道場自体が古い建物なので、あまり持ち堪えそうもない。窓から地面を覗くと、それは思ったよりも高さがあった、もしかしたら崩れ落ちるかもしれないと、悟った。さらに剣道着を着ているから、袴がうっとおしく、動きづらいのだ。

「まあ、今更戻るほうが辛いんだよね、実は」

更衣室には道着も竹刀も、防具も転がっている。つまづいたら怪我をしてしまうことも、分かっていた。

よし飛ぶぞ。そう思って、私はヒュッと飛び降りた。その瞬間、窓縁に袴が引っかかって、体がぐいっと引っ張られた。そのままでは、更衣室に背中ごと打ちつけられるところだった。

「きゃっ」

思わず叫ぶと、覚悟した。ぶつかる、と。しかし体は痛くはなく、なぜだか、軽かった。

「えっ？」

固く閉じた目を片方ずつゆっくり、開くと、誰かに抱き抱えられている、そんな光景が映った。

「え？」

私の体に重なる、体。私の体を包む、大きな体。そうっと後ろを振り向くと、夏が、そこにいた。

10 特別

剣道は楽しい。

だけど、それだけじゃない。

それよりももっと、私が剣道続ける理由。

剣道を“続けなければならなかった”、理由。

＊ ＊ ＊

「お前、何してんの」

夏は野球のユニフォーム姿で、そこにいた。そこにいて、窓から落ちてきた私を、助けてくれた。

「……夏」

「夏、じゃねえよ。いきなり降ってくんない」

そういえば、この道場の先はグラウンド。野球部の使用部分は、この剣道場の裏を通っていけば近いのだ。

夏に抱えられた状態で、私は、ぼうっとしていた。大きな体と固くて強い筋肉に触れて、何も考えられなくなっていた。こんなことは、初めてだったから。

「あっ。ごめんっ、なさい……」

はっとして夏から離れると、袴の裾を踏みつけてよろめいた。

「あぶねっ」

そう言って夏は、反射的に私の手首を掴んで、抱き寄せた。私の体は、今度は夏の胸にすっぽりと、抱え込まれる形になった。

「きゃあっ!!」

驚いて声を上げると、その声に夏が驚く。再び夏の体から離れると、ほんの一瞬ぶつかった胸が、やけに熱を帯びているのが、分かった。

「夏、体が熱いよ」

「ランニングの途中だったんだ、当たり前だろ。そういう椿だって、熱い」

「……あたしだって、練習試合の最中だから」

うまく言葉が作れない。本当は、すごく、すごく、お礼を言いたいのに。「助けてくれてありがとう」と、言いたいのに。

でも、椿だったら、言わないような気がした。夏のことを「バカ」で「単純」だと話す椿は、どこか、夏を否定しているところがあると、分かっていたから。

だから、言えなかった。私は今、椿だから。

「試合、見てた。ちょうど道場の前を通ったときに、しんとした中でパーン、っていう鋭い音がひとつ聞こえて、そのあと大歓声が起こってたから。何してるんだろうって覗いたら、剣道部の練習試合だった。ちょうど、お前が試合してた」

それは、試合形式の稽古が終わって、団体戦の試合をすることになったとき。メンバー5人のうち私は3番中堅で、開始10秒ほどで1本目の面をスパンと取ったやつだ。

「『始め』の合図のあと、3秒も経たないうちにお前、勝ってたよな」

それは、2本目の面。結局私は開始11秒で、その試合を制してしまった。

「お前、剣道やってたの? 先週ちらっと見たときも、勝ってた。6試合、全勝だったんだって?」

「さあね」

私はぷいっと、夏から目を逸らした。先週、夏が見たのは、椿。
“ほんものの”、椿。何だかとても、一緒にしてほしくないと、思った。

——矛盾してる、あたし。

夏にばれてはいけない。夏に、嘘をついている。

それなのに、夏に、桜^{あたし}を見てほしいと、思っている。

「……さっき、何してるって聞いたでしょ？ あたし、逃げ出そうとしたの」

「どこに？」

「分からない。とりあえず、どこかに」

どこか、椿として振舞わなくてもいいところに。

「何から？」

「剣道、かな」

「嫌なの？」

「ううん。剣道は楽しいよ」

「じゃあ、何で」

「分からない。たぶん、嫉妬してるんだと思う」

「嫉妬？ 何に？」

「内緒。言えないから、言わない」

「何だよそれ。お前、相変わらず時々分かんないこと言うよな」

夏は口元を歪ませて言うのと、呆れた顔で、笑った。お前のことは分かってるよ、とでも、言っているみたいに。本当に心の許せる人にしか見せないような、優しい目を、していた。

やっぱり椿と夏は、何か特別な関係があるのだろうか。初めて意識して、そう思った。

11 否定

「あたし、そろそろ道場に戻る。試合終わってるかもしれないから」
「ああ。俺も行かなきゃ監督に怒られる。遅刻したのせっかく校庭20周で許してもらったのに、サボってるなんてばれたら、今度こそ絶対丸刈りの刑」

夏は、坊主ではなかった。まだ短髪と呼べるくらいの長さで、野球帽を被ったら、少しだけ襟足がはみ出ている。

「いいじゃない。野球部は坊主が1番でしょ」

「あ、椿また前と同じこと言ってる。俺は野球部だから坊主っていう固定概念、嫌いなんだよ」

そして私は思う。前に椿が私と同じことを言ったというときも、夏は、同じように返したのだろう、と。

「じゃあね、夏」

「ああ、また明日な」

夏はグラウンドを向くと、一度もこっちを振り返らずに走っていた。銀杏並木の道を、遠ざかる白いユニフォームが、上下に揺れている。

「夏。助けてくれて、ありがとう」

聞こえないと分かっていたから、私は声に出して、言った。

「夏。あたしは椿じゃないんだよ。あたしは、桜なんだよ」

おまけに、もうひとつ。

「夏。あたしを見て。あたしに気づいて」

言ったあと、どうしてこんなことを口走ってしまったのか、分からなくなった。

でも、夏だったから、というわけではない。偶然ここを通りかかって助けてくれたのが夏で、今日の椿はいつもと違うと気づいてくれたのも、夏だったから。

ただ、それだけのこと。

だから、この胸に溢れている苦しさは。この、荒々しく動き出した鼓動は。

恋じゃない。

恋なんかじゃ、ない。

＊ ＊ ＊

「ただいま」

家に着くと、午後7時を過ぎていた。この時間に帰宅するのはいつものことだけれど、今日は特別、1日中感じていた緊張が、今更滝のように落ちてきた。椿として振舞った長い時間。それからやっと解放されたことへの安堵も、一緒に落ちてきた。

「桜、おかえり。遅かったね。もしかして、部活の助っ人頼まれた？」

リビングでは椿が、私の制服を着たままで、ソファに座っていた。「椿、今帰ったばかり？」

「ううん。5時には家に着いてたけど」

「そうだよ」

私の高校の剣道部は、週に1度、体力作りのトレーニングをしている。そしてその日はいつもより、部活が早めに切り上げられる。

私は椿にあまり負担が掛からないようにと、部長に頼んで今日をトレーニングにしてもらっていた。

「何でまだ制服なの？」

「だって、せっかく桜になったんだもん。もうちょっと楽しみたいっていうかさ」

「冗談！！ あたしはもう、絶対嫌よ」

すぐに答えを出した私に、椿は「ええ、何でえ？」と、甘ったるい口調で抗議する。

「ずるいよ椿。ネクタイ取りに戻らせるし、部活の助っ人なんてやらせるし」

「だって、あたし既に4回も忘れてんの。5回注意で1ヶ月、職員トイレの掃除だよ？！ そんなの絶対無理！！ それに部活は、あたしにだって分からないんだもん。みんな大体、前の日かその日の昼休みまでに言いに来るの。昨日は何も言われなかったから」

それにしても、よりによって剣道だなんて――。

あのととき、夏に言えなかった言葉の続きを、私は心の中で、ひっそりと、読み返す。

なぜ剣道が続いているのか。なぜ、あの道場から逃げ出したいと思ったのか。

答えは簡単。

「たぶん、嫉妬しているんだと思う」

2人して大好きだった剣道を、あっさりと捨てることができた、椿に。

いつも一緒だったのに、ひとり、颯爽と新しい世界へ足を向けていった、椿に。

嫉妬、している。

桜が、椿に。

ひとひらでは小さくしか咲けない桜が、ひとつでも大きく咲き誇れる、椿に。

「椿が途中で放棄したものを、私は続けてみせる」

「剣道を捨てた椿がここに立っていたなんて、何だか、許せないような気持ちになる」

でも、そんなこと言えない。私は椿が好きだから。

言えないから、言わない。

12 喧嘩

その日はすぐに母が帰ってきたから、学校の話はしなかった。そのままお互いのことは何も話さずに、次の日に学校に行ったら、なぜか私はいつもより、周囲に敬遠されていた。敬遠というより、凝視や戸惑いといったような。

視線は確かに送られているのに、そちらを見ると、ぱつ、と、目を逸らされる。そんなことは普段もよくあったけれど、やっぱり、何か違っていた。

「弥代さんってもっとクールな人なのかと思ってたけど、すごく明るいんだね」

「我が高のクールビューティは、我が高のアイドルになったな。ま、どっちにしろ俺たちが手を出せるような人じゃないけどな」

「ああ、憧れだけ持っておこうぜ」

ちらほらと、そんな風に話す声が聞こえてきた。

「いったい何なの？ 椿は何をしたのよ」

クラスの友達と言った。「桜、昨日はどうしたの？ いいことでもあったの？」と。

剣道部の友達は、「桜っていつもはトレーニングも平気な顔でこなすけど、昨日は違ったよね。『もう疲れた』とかいきなり言い出して。みんなびっくりしてたんだよ」と、言った。

それを聞いて、私は、何となく椿のしたことが分かった。きっと椿は普段の椿のまま、桜になろうとはしないで、生活していたのだろう、と。

——ずるいよ、椿。

私だって、普段の自分のままでいたかったのに。それなのに、ちゃんと椿になりきって、椿のイメージを壊さないように、したのに。

ずるい。椿、ひどい。本気で、そう思った。
だけど、とにかく今は、早く椿に会って話を聞かなければ。
部活終わり、私は走って家に帰った。

＊ ＊ ＊

「嫌！！ あたしはもう絶対嫌だからね」

「そんなこと言わないでさ、ねえ?!」

家に戻ってすぐ、椿と言い争いになった。原因はこれまで通り、やっぱり椿。私が家に帰ると椿は玄関で待ち構えていて、驚いている私に、突然言った。

「桜、おかえり！！ ね、もう1回学校入れ替わらない?!」

「な、に言ってるのよ！！ あれは1度きりでしょ！！」

そこからしばらくは玄関でそのやり取りを繰り返し、そのうち母が帰ってきたことで一時中断となったのだが――。

「もう寝る！！ 椿も早く部屋に戻って寝なよ」

「だめ。桜がやるって言ってくれなきゃ、戻らない」

「何なのよ、もう！！」

と、食後にまで続いていた。

「何で嫌なの？ あたしの学校楽しくなかった？ クラスみんな仲良かったでしょ」

「あたしがそういうの苦手なの、椿だって学校行って分かったでしょ？ ひとりのほうが楽し、誰かに気を使うのは疲れるの。面倒なのよ」

そう言うと、今度は椿が、当然のように返す。

「気を使う必要なんてないじゃない。だって友達だよ？ 気なんか使う関係じゃないでしょ」

「椿には分からないよ。あたしと椿は、違うもん」

「違うって、何が」

椿は一層、強い口調で言った。初めて見る表情に、私は思わずぐっ、と口を噤み、黙る。

「桜。あたしと桜は何が違うの。教えてよ」

「だって……違うじゃない。性格だって学校生活だって、全然違う。あたしは椿みたいのに、何でも楽しければいい、みたいな考え方はできない。あたしたちが同じなのは、顔だけよ」

このとき椿にそう言ってしまったことを、私は一生忘れない。

椿も、一生忘れないと思う。

「桜、あたしは楽しいことは好きだけど、楽しければそれでいいなんて思っていない。あたしだって、理由もなく突っ走ってるばかりじゃないよ。桜は分かってくれてると思ってた。ねえ桜？ あたしが今、もう1度入れ替わろうって言うのにも、理由があるんだよ？」

くだらなくて、何だそんなことって思うようなことでも、ちゃんと理由があるから言ってるんだよ？」

椿は諭すように語って、そのあと、哀しそうに俯いた。

このとき椿が言ったこと、椿の見せた私への失望の表情を、私は、一生忘れない。

椿だって、忘れないだろう。

12 喧嘩（後書き）

この双子、初めての喧嘩です！！

初めてのケンカが入れ替わりについてって、何なんでしょう…

さて、今のところ全然恋愛が絡んでいないような気がします、次に次くらいからは恋愛主体になってくるのではないかと。もちろん桜と夏です。

と、いうことは……

13 恋の話

もう絶対嫌だと思っっていたけれど、私は、もう1度椿としてあの学校に通うことになった。しかも今度は無期限で。なぜ私がそんなことを受け入れたのかというと、椿が私に入れ替わってほしいと言った“理由”を、聞いたからだった。

「気になる人？」

「そう、昨日学校で会ったの。一瞬目が合っただけで話したりもしなかったんだけど、何かすごく気になるの。こんなこと、初めて」と、椿は赤く火照っていく頬に手を当てながら、恥ずかしそうに話した。

「で、その人に会いたいから、もう1度学校を代わってほしいって？ それっていつになるのか、全然分からないじゃない」

「うん。でも、会った場所、中等部と高等部の校舎の間のところなの。あんまり人が来ない隠れた空間みたいな。だからもしかしたら、いつもそこに来てるのかもしれないし。それにあたし、早く見つけれられるようにするからさ」

椿がそんなことを話すのは、初めてだった。お互いの学校生活を言い合ったりしない私たちは、もちろん恋の話だってしない。椿がどんな人が好きで、どんな風になるのか、もしかしたら私は、椿の周りにいる友達よりも、椿のことを知らないのかもしれない。

「分かった。椿の恋を応援してあげる」

「本当?!」

「ただし、早く見つけてよね。それと、いつもの椿のような明るさで周りと話さないで。少しは落ち着いてよ。あたしはそんなキラじゃないの。今日、みんなに驚かれたんだから」

「え〜?! いいじゃない。だって桜のフリするの、大変なのよ。」

『桜はクールだから』って、何回言われたと思ってるの。桜はもっと明るくいるべき!!」

人と馴れ合うのは面倒なのよ、そう言ったら椿は、仕方ないなという風に、溜め息をついた。

「ねえ、桜は誰か、気になる人はいないの？」

「え？」

「お互いの恋の話、しようよ。全然話したことなかったじゃない。あたしね、本当は、桜と恋の話とか学校の話とかしたかった。あたしの知らない世界を桜が持ってるなんて、ちょっと嫉妬しちゃうけど、すごく聞きたかったの」

「そんなの、あたしだってきつと嫉妬しちゃう。あたしがいないところに椿の世界があるなんて」

私たちは笑い合った。2人して、幼稚な心を持て余している。出会いは無限に広がっているから、世界なんて、いくつあってもおかしくないのに。

「これからは、お互いの学校とか、恋のこととか、話していこうね」

「うん。そうだね」

そうやって、大人になっていけたらいい。だっていつかは私たちだって、それぞれ大切な人を見つける日が来るのだから。そのときまでに、この過重なお互いへの依存を、少しずつ、減らしていけたら。

「……ねえ椿？ 聞いてもいい？」

「何？」

ずっと、気になっていたこと。

だけどずっと、聞いてはいけけないと思っていたこと。

「夏……、入来夏と椿って、何か特別な関係なの？」

だって、それを聞いてしまったら、私の中で、何かが壊れてしまいうそで。

14 告白

「あたしと夏？ どうして？」

椿は不思議そうに顔を傾げて、言った。

「夏、椿のこと話すとき、何かすごく優しい目をしてた。もしかして、椿のこと好き、なのかなと思って」

私がそう答えると、椿は一瞬あっけにと取られたあと、きゃはは、と笑い声を上げた。

「まさかあー。あたしたちはただの友達だよ。1番仲の良い、男友達」

「椿はそうかもしれないけどさ、向こうはそう思っていないかもしれないじゃない」

「もしかして、もしかして桜、夏のこと好きなの？」

「……え？」

「夏のこと気にしてる」

「そんなこと、ない」

私は、椿が気になっているだけ。ただ、それだけ。

「桜がそれでいいんなら、いいけど。でも、誤解しないで。あたしと夏の間には何もなかった。それを望んだときもあったけど、今はもう、あたしは夏のこと友達としてしか見てないから」

「え？」

椿の言葉が、鋭く突き出ていた私の心のアンテナに引っ掛かる。

「椿、それを望んでいたって、どういうこと？」

「え？ ああ、それはね……」

椿は自分の言ったことに驚いていて、それは、無意識に出てしまった言葉のようだった。きっと椿自身、それを言うことはないと思っていたのだろう。

「去年の夏だったかな。あたし、ずっと夏のことが好きで告白したんだけど、すっぱり振られちゃったんだ」

椿は過去を懐かしみ、少しだけ愁い^{うれ}を帯びた瞳で、私を見つめた。

＊ ＊ ＊

1年前の夏、椿は夏に告白した。だけどそれは、クラスの友達と賭けをして負けた、罰ゲームだった。

「はーい、負けは椿。罰ゲーム決定!!」

「ええっ、マジ?! 罰ゲームって何なの?」

「発表しまーす!! みんなで考えました。罰ゲームは……夏に告ってきてくださいー!!」

たまたまその場に、夏はいなかった。夏は冗談の告白とかを異常に嫌うから、夏がいたら、こんなことできない。だからこそ、みんな、夏の反応が見たかった。夏の暑さに、悪ふざけが勢いを増していた。

「椿と夏はそろそろ付き合うべきでしょう」

「やだ、やめてよ。あたしと夏はそんなじゃないよ」

そのころ、椿は本当に、夏のことが好きだった。誰にも言ったことはないけれど、椿はずっと、夏のことが好きだった。

だけど、告白なんて到底できないと思っていた。このまま友達としての関係が続いていけるだけでいいと。そんなときにこの機会。椿にとっては、チャンスでもあったのだ。

——もし振られても、みんなは冗談って分かってるんだし、夏は、告白を断ったからって気まずくなるような奴じゃない。それに、夏がもし、あたしのことを好きでいてくれたら——。

「よし!! じゃあ早速行ってくるね!!」

「おお。椿めっちゃやる気じゃん!!」

「サクッと告ってサクッと恋人になってくるから!!」

周囲には、いかにも罰ゲームを楽しんでいるという感じを見せて。

そうして椿は昼休み残り10分に夏を体育館裏に呼び出し、みんながこっそり聞き耳を立てている中でサクッと告白し、サクッと振られたのだと言った。

15 夏に恋する

「椿とは、付き合えない」

夏のそのたったひとことが、椿には、何よりも辛くて、悲しかったのだという。そして、そのとき初めて、どれほど夏のことが好きだったか気づいたのだと。

「すごく、すごく後悔したの。何であたしは友達のままでもいいと思ってたのか。もっと、夏に好きになってもらえるように努力したら、何か、変わっていたかもしれないのに」

そういえばあのころ、学校から帰ってきた椿が、リビングを避けて部屋に閉じこもってしまったことがあったのを、思い出す。

「椿？ どうしたの？」

部屋をノックしても呼びかけても返事はなくて、心配した私は、入るよ、と、ノブをひねった。だけどそのとき、椿が、「だめ!!」と、突然叫んだのだ。

「大丈夫、何でもないの。ちょっとやらなきゃいけないことがあるから、ひとりにして。夕飯になったら行くから。ちゃんと、行くから」

あのととき椿がやらなきゃいけなかったのは、“泣くこと”だったのだろうか。

椿は夕飯に降りてきて、翌朝も、いつも通りに学校に行った。私から見ても、本当に、いつもの椿だったのだ。

「椿は、夏を諦めたの？ 今はもう友達としか思っていないって、本当！？ だって、ずっと同じクラスなんですよ。近くにいて、そんなに好きだった人を、忘れられるものなの？」

「あたしもね、無理だと思ってた。これからまたいつも通り友達として仲良いままなんて、絶対にできないって。あたしがいろんな部活の助っ人を始めたのも、生徒会に入ることを決めたのも、みんな、その時期。とりあえず、いろいろなものに目を向けたかった。夏以

外に、夏以上に夢中になれるものを、見つけたかったの」

「見つかったの？ 夏以上のものが？」

椿はうん、と頷いて、また、頬を紅く高潮させる。

「さっきも言ったじゃない。あたしは桜の学校で、出会ってしまったの」

椿があそこまで言う相手は誰なのか、私はすごく、知りたくなかった。夏よりも好きになれる人、なんて、いないと思っていたから。

「早く見つけてね」

「大丈夫！！ あたしもう、何もしないままなのは嫌なの」

その椿の言葉を、私はすんなりと信じていることができていた。

「ねえ桜、桜は、夏のことが好きなの？」

「え……」

「桜が違うって言うなら、それでもいいよ。でも、もし桜が夏のこ
と気になってるんなら、あたしのことなんか気にしないでいいんだ
よ」

「うん、ありがとう」

——でもね、椿。

——分かってる？

私が気にしていることは、もっと、別のところにあって。

——椿がだめなら、あたしもだめなんだよ。

だって私は、“椿”としてしか夏のそばにいられない。椿とは付き合えない、ということは、夏が、椿の振りをした私を好きになることも、有り得ないと思うから。

——だからあたしは、夏のことを好きになっても、辛いだけなんだよ。

だから私は、夏に、恋なんてしない。

哀しいだけの恋になると、分かっているから。

16 秘密

入れ替わりは2日後に行われた。朝は以前と違ってスムーズに、椿はリボンを、私はネクタイを締めて、学校に向かった。

椿は前の日の朝に、もし私が嫌なら部活の助っ人は当分休むことにする、と言ってくれた。生徒会の活動は夏休み明けの体育祭・文化祭までは大きな行事もなく、クラスマッチがあるだけでそんなに大変ではないらしい。それでも普通の学生生活よりは、何かと充実した、忙しい毎日になるだろうけれど。

「大丈夫。あたしも、椿を見習って学校を楽しんでみたい。だから、とりあえずやってみる」

だって、せっかく椿の学校に通うと決めたのだから、この間のように1日中神経をすり減らして過ごすのは、何だかもったいないような気がして。

——椿になりきってみよう。そうしてあたしも、そのうち変わっていったら。

これまでにない、挑戦心。

私の中に生まれた不思議なワクワク感ほ、胸を躍らせ、弾ませた。

* * *

相変わらずのクラス。椿の友達はみんな、なぜこんなに明るく楽しそうなのだろうと、思ってしまう。

「まあ1日2日じゃあ無理だね」

どうやらしばらくは、昼休み、生徒会の仕事を理由に屋上に来る

のが日課になりそうだ。賑やかなのは嫌いではないけれど、慣れないから、苦手。これがこの先ずっと続くのかと思うと、やっぱり不安になる。

「ここを見つけてよかった」

陽射しを手で覆い隠すと、指の隙間から、眩しい陽が漏れてくる。それさえも気持ちが良い空の下で、私は、夏とここで会ったことを思い出す。

「空に手が届くような気がして、好きなんだ」

夏がやったように、手のひらを空にかざしてみる。大きく開いた指の隙間からは、陽の光筋と、空が映る。今日もまた、ターコイズブルーの空が広がっている。

「真似してんの？ 俺の」

背後から、夏の声。振り向くと、夏がいた。

「また来たの？」

「それ、俺のセリフ。ここ2日くらい来なかったくせに、初めから自分が見つけた場所、みたいに言って。俺のほうが先に見つけてたんだよ、ここは」

「もしかして夏、毎日来てるの？」

「いや、気が向いたときだけ」

「じゃあ何で、あたしが来なかったって、知ってるの」

そう言うと、夏は口籠らせて、視線を逸らした。私の隣に立って、同じように空を仰ぐ。

「どうして隣に来るの」

「別に、理由なんてないけど」

「ふん……」

それから私たちは、黙ったまま、空を見ていた。後ろから見たら、ベランダの柵に並んで立っているカップルのように見えるかもしれないけれど、2人ともそんなことは気にならずに、ぼうつと、空を

眺めていた。

結局、聞いたことに答えは返ってこないまま、だけどそれでもいいような気がした。夏の言うとおり、ここは開放的で、何も気にならなくなるのだ。

「夏、明日も来る？」

「来るよ」

「ふうん」

そんな会話を交わしただけで、私と夏だけの、秘密の場所ができた。

「これからもっと、お互いのことを話していこうね」

椿とはそんな風に約束したけれど、このことは、話さないでおこう。

初めて夏と共有した秘密を、私は、このまま2人だけのものにしたいと、思った。

17 変化。自覚。嘘。(前書き)

テーマが多い回なので、内容もギュッと詰まっています。
分かりづらいかと思いますが、ご了承ください。

17 変化。自覚。嘘。

1週間も経てば学校生活には慣れて、初めのころはあんなにうっとおしく感じた友達も、今では私の日常にちゃんと存在している。不思議なものだ。

朝、教室に入った私の元には乃李がやってきて、「おはよう」と声を掛ける。私もおはようと返し、ホームルームが始まるまでの7分間、おしゃべりして過ごす。そのうち喬や他の友達も集まってきた、笑い声が絶えない。放課後までずっと、そんな感じ。

私はそのうち、「椿」と呼ばれることに違和感を感じなくなっていった。そう呼ばれれば返事をするし、そのせいで、母親が椿を呼んだとき、一緒に返事をしてしまったこともあった。もちろんそれは、椿と同じで。

部活の助っ人は、最近頼まれることが多くなった、と、椿が話した。

「毎日頼まれるわけじゃないのよ。練習試合のメンバーが足りないとか、1人欠席して部員が奇数になるから稽古しにくいとか、そういうときにだけ、頼まれる程度だったの。なのに桜ったら、最近妙に帰りが遅い日が続くと思ったら、助っ人してたなんて」

どうやらあの剣道部の練習試合で、やっぱり私は注目を浴びてしまったらしい。そういえば体育の授業でも、つい本気になって走ったら、陸上部員のタイムを上回っていた。考えれば原因はいくつもあって、すべて、私が自分で引き起こしてしまったのだ。

日常が、変わってきている。それは恐ろしく早いスピードで、私はまだ、全然ついていけない。だけど、そんな日常に、習慣が生まれ始めている。

絶対無理だと思っていた、椿の学校生活。やってみると、そのうちそれが、当たり前になってくる。

不思議なものだ。今はもう、椿を否定する心など、微塵もなくな

っているのだから。

* * *

「椿、今日も生徒会なんですよ？　いってらっしゃい」

4限のチャイムが鳴ると、みんなはそんな風に私を送り出すようになった。私はその言葉を背に、あの屋上へと向かう。

「よ」

「よ」

手を軽く振り上げて、私と夏は、いつものようにあいさつをする。

「空に手、届く？」

「まさか」

「前に言ってたじゃない。空に手が届きそうだって」

「届く、とは言っていないだろ。それにあれば、いつもより空に近づいてるっていう意味だ」

「違うの？」

「全然」

昼休み、お弁当を持って私たちは、この屋上にやって来る。気が向いたときだけ、と言っていた夏は、毎日が向いているようだ。

夏と2人で過ごす時間は、ゆったり、のろのろと進んでいる。まるで、私が時を動かしているかのよう。もっと長くこの時間が続けばいいのにと、わざと、時を遅くしているみたい。

私にはもう、分かっていた。そんなことを思ってしまう自分、今、この胸の中に、何が詰まっているのか。

「夏さ、ここに来るとき、みんなに何て言ってるの？」

「別に。ちよっと行ってくるって」

「どこ行くの、って言われない？」

「言うよ。乃李とか、匡基ナギキとか。でもそんなの、聞こえないフリし

てる」

「ふうん、ひどいんだ」

「お前は何て言ってるんだよ」

「生徒会の仕事」

「そっちの方がタチ悪い。俺は、嘘はついてない」

「同じよ。結局は言わないんだから」

「一緒にするなよ」

私は、夏を――。

私にはもう分かっている。夏と話するとき、私は、桜に戻ってしまっている。桜として、夏の側にいたいと、思っている。

私は、夏のことが――。

「……嘘は、嫌い？」

「嫌だね。前に、嘘をつかれたことがあるんだ。信じてたからこそ、すごくショックだったし、ムカついた。友達とか信じてる人に言われたら、最低」

私は、夏のことが……好き。惹かれてはいけないと思っていたけど、心はそんな脆い否定の壁を打ち破って、貫いた。

今、どうしようもなく、夏が好き。

だけど。

「……それって、あたしもその中に入ってるの？」
「……。ああ、もちろん入ってるよ」

嬉しいはずなのに。

なのに、どうしても、喜べないのは。

私が、椿ではないから。私は、桜だから。

私が、夏に嘘をついているから。

18 嘘の行方

夏のことを好きになったと椿に告げたのは、恋を自覚して3日後のことだった。

「ええー！！　って、別に驚かないよ。だってあたし、桜は夏のこと好きになるって、分かってたから」

「どうして？」

私がそう尋ねると、椿はいたずらに歯を見せて、ニツ、と笑った。「夏って、桜の周りにはいないでしょ。学校通ってみて気づいたんだけど、桜のクラスって、みんなバラバラ。夏みたいに、クラスを盛り上げようとする人、いないもんね」

だけど夏は、2週間後に控えたクラスマッチの練習をやるうとクラスをやる気にさせ、もしかしたら優勝できるかもしれないという自信を、周りに与えている。今までひとりであることを好んでいた桜なら、みんなで楽しもうとする夏に惹かれるのは必然だと思ったと、椿は言った。

「必然って、何？」

「うーん、言葉にするのは簡単なんだけど……」

椿は腕を組んで、考える仕草をしたが、そのうち、やっぱり分かんないや、と降参し、腕を解いた。

「まあでも、たぶん、運命とか、そういうものよ」

「運命、なんて、あるのかな……」

「あるよ！！　あたしたち2人が双子として生まれたときから、運命は用意されているの。あたしの運命も、桜の運命もよ。だから、応援してるからね！！」

そこにあたしと夏の運命はあるのかな、と、心の中で、椿に問う。「いいよ、そんなの。あたしは別に、夏が好きだからってどうしたっていうわけじゃない」

「ダメダメそんなの！！　もっと、夏と2人きりになったらいいの

よ。それでお互いのことを話して」

「だって、夏も椿も、お互いのことはよく知ってるんでしょ？」

「え？ ……ああ、そうか。そうだった。桜のことは、話せないんだよね」

椿が桜に、桜が椿になりきると自分から言い出したくせに、椿は「もう！！ じれったいなあ」と、ふくれ顔をしてみせた。かと思うと、何か考え始めて、うーん、と、何度も小さく唸り声を上げる。

「椿、どうしたの」

「うーん……。でも、夏なら……。大丈夫かな」

「椿。何を言ってるのか、分からない」

そしてソファから飛び起きた椿は、私に、こんなことを言ったのだ。

「桜。夏になら、あたしたちのこと、ばらしてもいいよ」と。

＊ ＊ ＊

椿のわがままから始まって、今では日常化してしまった、嘘。

私はそれを、夏に話すことなんてできない。

「ううん。言わないよ、椿。夏には話さない。だから椿も、絶対、言わないで」

「どうして？ 夏は言いふらしたりしないよ。たとえみんなに知られてしまっても、桜が気にすることなんかない。入れ替わろうって言った日から、あたしは、ばれたときは自分の責任だって、ちゃんと心に決めてたんだから」

「そういうことを言ってるんじゃないよ。とにかく、絶対に言わないで」

「だってそれじゃあ、いつまでたっても桜は夏の前で桜になれないじゃない」

「そんなこと、あたしは望んでない。あたしはただ、夏のそばにいたいだけなの。それが桜としてでも椿としてでも、どっちだっていい」

もし夏が私たちのことを知ってしまったら、私は二度と、夏のそばにいられない。私がついた嘘は、それほどの威力と、重圧を抱えている。

私は、夏のそばにいたい。“椿として”だとか、“桜として”だとか、なんて、関係ない。だって夏のそばにるのは、夏のそばで笑っているのは、確かに“私”なのだから。

——ただ、そばで笑っていられたら。そばで笑っていてくれたら、いい。

そのためなら私は——。

夏のためなら、私は、夏に嘘をつき続けることだってできる。

19 クラスマッチ開幕

7月になった。去年よりも少しだけ、梅雨入りが遅かったのが心配だったが、何とか今日までに、梅雨はきれいに明けた。2週間振りに、空はターコイズを映し出している。

「それではこれより、クラスマッチの開幕です！！」

生徒会長の合図で、涌き上がった歓声。全校生徒が一同に介した体育館は蒸し暑く、夏の訪れを充分に示している。

「椿、やっと本番だね！！ 大変だろうけど頑張れ！！」

私の横を何人かがすれ違い、声を掛けていった。たぶん、同じクラスの友達だろう。ここ最近はこの準備で、休み時間も放課後もうくに教室にいられないほど、忙しく動き回っていたから。

「では実行委員のみなさん。暑いけど、今日から3日間、頑張って成功させましょう」

クラスマッチはクラス対抗の球技大会。ソフトボール、バレー、バスケット、サッカー、テニス、バトミントンを、3日に分けて行い、総合優勝を決める。スポーツ推進高だからこのイベントだ。

どれも雨が降るとできないものばかりだったから、次の週に延期の可能性があった。だけど2週間後には期末テストが控えているから、実行委員はもちろん、全校生徒が梅雨明けを望んでいた。その甲斐あって、今日のこの快晴。急に暑くなったけれど、湿気のないカラッとした天気は、風も爽やかで、気持ちが良い。

「椿は午前中、バスケット担当ね」

実行委員は手分けして各競技につき、審判をしてくれる先生や部員の補佐をする。つまり、クラスマッチには参加できない。私が競技に出られないことはクラス中が残念がついて、でも生徒会は実行委員を兼任する、というのは、初めから決まっていたことだった。私がそれを知ったのは、椿から。お互いの学校生活を報告し合っているとき、不意に思い出したように、言った。

実行委員なんて憂鬱だ。そう思って学校に行った次の日。

「椿がいれば優勝も夢じゃないのに。椿には全部に出てもらうつもりだったんだよ」

というクラスメイトの言葉を聞いて、心底、実行委員の方が全然マシだ、と納得したものだ。マシだ、と納得したものだった。

「椿、お前これからバスケット行くんだって？」

「喬」

後ろから私の肩を叩いたのは、喬。その隣には、匡基と夏がいた。

「みんなはこれから？」

「俺らはバスケット第2試合だから、それまで外で練習なんだ。ところで椿、いつまでバスケット見てる？」

「午前中は第1体育館担当だから、バスケットはずっといるよ。今日は2回戦まででしょ」

「じゃあ、俺らの試合も見てくれる?!」

「どうだろう？ 4コートあるんだし、どの試合の担当になるかわからない」

「ああ、そっか、そうだよな……」

喬はがつくりと肩を落として、隣の匡基にもたれた。

———そういえば喬は……。

思い出した。喬は椿に振られたばかりだった。どうやら、まだ椿を好きらしい。やる気を無くした様子の喬は、匡基に腕を引かれながら、体育館を出て行った。

夏だけが、そこに残される。

「夏は、行かないの？」

「いや、行くけどさ……」

夏は私をちらりと見て、目を伏せる。

「何よ？」

「いや、だからさ……」

「何」

言いにくそうに口を噤んでいた夏は、再び顔を上げて、今度は私の目をじっと見て、言った。

「お前、喬のことどう思ってる？」

そのときはまだ、その言葉に込められていた意味に、私は、気づいていなかった。

20 後味苦味

喬が椿に振られた、ということは、クラス中が知っていた。もちろん夏だってそう。だけど、振られた喬をみんなが冷やかす中、夏は輪を外れていた。同じく離れたところで見ていた椿と、全く関係のない話をしていた。

「夏はね、もともとそういう冷やかしか嫌うんだけど、そのときは喬もそこで一緒に笑ってたからさ。自分が怒るほどのことじゃないって、思ってたのかもね」

「でもみんなが話してるのに、気にならなかったのかな。『何で喬を振ったんだ？』って」

「さあ？　そういうこと聞くほどミーハーな奴じゃないし、単に、あたしが喬を振ったことにも、興味がなかっただけかもしれないし」
「またそんなこと言って」

椿の話聞いて、まだ恋を自覚したばかりの私は、そんな夏の真面目なところが、すごくいいなと思っていた。友達を大切に思う、友情に熱い人なんだ、と。

夏への恋心が熱を帯びて形作っていくのを、確かに感じていた。

＊ ＊ ＊

「……知りたい？　あたしが喬を、どう思ってるか」

私は試すような口調で、夏に質問し返した。今になってどうして、夏がそんなことを言い出したのか。もしかして、という期待が、一瞬、頭を過ぎった。

「知りたいっていうか……。まあ、そうなんだけど」

「な〜にそれ？」

「いや、実はさ……。あいつ、まだ椿のことが好きだって、俺、相談されて……。喬が椿に聞いてくれて言ったんじゃないから。俺が勝手に、あいつの気持ち、お前に話してるだけなんだ」

——なに、それ。

心の中はどんより、梅雨の日の空に覆われていく。

もしかして、夏は私と喬の関係を少しだけでも気にしてくれてい
るんじゃないかと、期待してしまっていた。

そんな期待、してはいけなかった。期待するだけ自分が傷つくの
だと、初めから、分かっていたのに。

「あたしは、喬を恋愛対象として見れない。もし、喬が以上の関
係を望んでるんなら、友達だっていられない」

「そんなこと言ってないよ。喬はただ、好きでいるのはいけないこ
とかって、悩んでて。俺はそうやって相談された」

私はひとつ、自分の中である賭けをする。

「夏は、どう思う？」

「え？」

「振られた相手を想い続けるのは、いけないことだと思う？」

——私が夏を好きになってしまったのは、いけないこと？

「……俺には、分からない。そんな経験ないし」

「もし、夏があたしと同じ立場だったら、振った相手が自分をまだ
想っているの、どう？」

「どうって……言われても、」

夏は俯き、答えを探している。そのとき試合開始10分前のチャ
イムが鳴って、私は溜め息をひとつ、小さく吐いた。

「夏、そろそろ行ったら？ あたしも、もう行く」

「あ、ああ、行くよ」

これ以上夏からは、私の欲しい言葉は、貰えないような気がした。

——夏。あたし、夏には、そんなこと聞かれたくなかった。夏は友達思いだから、喬のために言ったんだろうけど、そのとき、あたしの気持ちは考えてくれなかったの？ あたしは、夏の大切な友達じゃなかったの？

初めて、後味の悪い、夏との2人きり。

コーヒーを飲み干したあとに豆の挽ききれなかった部分が舌に残ってしまったような、ザラザラした名残り。

苦くて、いつまでたっても消えない。

21 欲望の芽生え

視線の先に、夏がいる。

「きゃー!!! 入来くーん!!!」

「かっこいいー!!!」

隣で叫ぶ女子たちは、クラスメイトではない。よく見れば、3年生もいるし、1年生もいる。

試合中だった。バスケの第2試合。私はちょうどその試合の得点係で、目の前のコートを走る夏がゴールを決めるたび、得点をめくっていた。

周囲の歓声に気づいたのは、5分のタイムを挟んで、第2クォーターに突入してすぐ。私の横に女子が集まり出してきて、夏の名前を呼び始めたのだった。

夏が動くたびに、湧き上がる黄色い声。それはそのうち、「おおー!!!」という、男子をも巻き込んだ大歓声になった。

「夏って……」

声を出したつもりはなかったのに、心の呟きは外に出てしまっていて、「入来くんがどうかしたの?」と、相手クラスの得点係をしていた同じ実行委員の女の子が、私に言った。

「あ、ううん。夏って野球部なのにバスケできるんだと思って、びっくりして」

「今さら何言ってるの。入来くんって学校一のスポーツ万能じゃない」

「そうなの?」

「そうなのって、去年椿と一緒に表彰されてたの、忘れたの?」

表彰? とまた聞き返すと、驚いたその子から、学校で一番スポーツ活動に貢献した男女1名ずつが、毎年冬に全校生徒の前で表彰されるのだと聞いた。椿は助っ人として出場した大会で団体優勝に導き、夏は野球部の甲子園出場の夢を叶えたのだと。驚いたことに、

夏は1年生ですでに、野球部のエースピッチャーだった。

「エースねえ」

初めて夏を知ったとき、椿が「筋肉バカ」と言っていたのを思い出す。あのあと学校で夏に会っても、椿の言っていたイメージとは全然違うと思ったものだった。

「だからこんなに女子が多いんだ」

「それだけじゃないよ。もちろんスポーツのできる男子はかっこいいけどさ、入来くんは面白いし真面目だし、いつも友達に囲まれてるでしょ。人気者ってところが、またいいんだよねえ」

私は直感した。もしかしてこの子も、夏のことが――。

試合そっちのけで話しているくせに、夏がゴールを決めると、私は得点をめくっていた。ちらちらと視界に映る大勢の人影の中に、夏だけをしっかりと捉えていたということか。

「椿はどうなの？ 入来くん仲良いよね」

「え？」

「入来くんのこと、恋愛対象として見たことはないの？」

「あたしたちは、友達だもん」

そう。夏にとって、私たちは、友達。それ以上望んでも叶わないのは分かっている。それ以下でもないということも、分かっている。大切な友達だと、夏は言った。椿のことを信じている、と。

だけどそれは、とても寂しいことではないだろうか。

だって、私は、椿として夏の友達でいることに、心苦しさを感じ始めている。そばにいられるなら椿でも桜でも関係ないと思った心とは裏腹に、桜としての私を見てほしくてたまらなくて、声に出してしまいそうな、押さえきれない欲望が、芽を覗かせている。

私はきつと、このまま欲望の渦に絡めとられていく。成す術もなく、流されるままに。

私は、このまま夏を好きで好きで、どうしようもなく、感情が溢れ出してしまったときが、夏のそばにいらなくなる時なのだと、悟った。

22 初めての恋（前書き）

またまた話がそんなに進んでいませんが、桜は恋愛初心者なので、順序を踏んでいかなければならないのです。

とりあえず今回で折り返しという感じです。

次回はもうちょっと物語を動かそうと思います。

22 初めての恋

大差で勝利したその試合。1回戦だというのに、周囲のどよめきはあまりに大きく、騒がしかった。

試合終了の挨拶を交わしたあと、喬は得点ボードにもたれて立つ私のもとへ走ってきた。

「椿!! 勝ったよ!!」

「見てたよ。おめでとう」

「もう俺、椿の姿見つけてからめっちゃめっちゃ試合頑張ったよ」

「2回戦も頑張って」

「もちろん!! 椿見ててよ」

「それはどうか、分からないけど」

喬は満足そうに笑って、チームのほうに戻った。かと思ったら、網にかかった魚のように、ジタバタとその場で地団駄を踏んでいる。運動神経のいい喬と夏はソフトにも出場するらしく、その試合がもうすぐ始まるのだという。2人はまだ熱気の冷めない余韻を残して、体育館を飛び出していった。

「あ、夏……」

何も話せないうちに、夏が行ってしまった。せっかくだから、夏に、「おめでとう」と言いたかったのに。

たかが1回戦で、と思われても。

私が夏の姿に見惚れていたのは本当だから、かっこよかったよ、と、ひとこと、言いたかった。

喬に言った「見てたよ」の言葉は、夏のこと。

「夏を見てたよ」という意味だったから。

* * *

バレーの得点係をしていた午後は、夏に会うことはなかった。クラスの女子のバレーの試合が始まったとき、ちょうど男子バスケットは2回戦の最中だったらしい。そのあと乃李が、男子バスケットは2回戦も快勝だったと教えてくれた。

「うちのクラスは今日負けなしだって。みんな頑張ってるでしょ？」
「へえ、そうなんだ。すごいね」

確かに普段の体育でも、うちのクラスは平均的に成績がいいと思った。私が全部出なくても、優勝できる可能性はあるのだ。

「あたしが出てなくても、全然影響ないじゃない」

「違うよ。椿は実行委員で試合に参加できないから、優勝を椿にプレゼントしようって、夏が言ったからさ。それでみんな、頑張ってるんだよ」

「え？」

乃李は「あぁっ、言っちゃったぁ」と、はっとして口を押さえる。

「夏が、言ったの？」

「んーそうだよ。女子がみんな、椿がいないとダメだって消極的になっててね。たぶん、やる気にしようと思ったんじゃないかな。それに椿だけが参加できないの、気にしてたよ」

思わず顔が緩みそうになるのを、私は頬の筋肉を必死に突っ張って、堪える。

夏が私のことを気にしてくれるなんて。夏が、私を見てくれてたなんて。

「椿も頑張ってたね。あたしも練習してくる」

「うん。ありがとう」

あんなに憂鬱に感じていた、クラスメイトと過ごす日々。それが今はこんなにも、仲間の一員になれたことが、ただ単純に、

嬉しく感じる。

夏を好きになったことが、今の私をつくった。知らなかったものをいくつも知って、楽しいことを、何度も経験した。

夏がいて、私がいる。夏がいなければ、私はいない。

——あたし、夏が好き。夏が、大好き。

揺るぎない一途な想い。これまでに感じたことのない、心の動揺と、抑揚。

これが恋をするということ。

夏に、恋をしているということなのだろう。

23 告白と賭け

クラスマッチ最終日は全競技準決勝から。うちのクラスは男子ソフトとサッカー、女子はテニスとバトミントンが残っていた。

「みんな、今日は頑張ってるね」

ホームルームが終わって、サッカーの応援にグラウンドに向かっていた。ちょうど私もバレーの手伝いに体育館へ向かうところで、クラスメイトみんなで大移動をしていた。

「任せろよ。今日は俺ロナウジーニョだから」

「涼平が何か言ってるさ」

涼平はサッカー部の2年生エースで得点王。ちなみにクラスマッチで部活動と同じ競技に参加する人は、試合時間の半分だけ、と決まっている。

「俺が出てる間に5点はいくね」

「ただのサッカーバカなくせに」

「何だよ椿、いつも俺のことバカ呼ばわりして。俺本当にすごいんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「うわっ、全然信じてねーんだもんな。じゃあもし決勝に進んで俺が5点入れたら、椿、俺と付き合ってよ」

「は？」

ざわっ、と、どよめきが起こった。私たちのそばにいたクラスメイトのみんなが、しっかりと、一連の流れを耳にしていた。

「えっなに？ 涼平が椿のことが好きだったの？！」

そう聞いた女子に、涼平は「ん？ そうだよ」と、あっさり答える。

「うそ?! マジで？」

「オモシレーことになってんじゃない」

クラスメイトの騒ぎようは周囲にまで広がって、上級生にも下級

生にも人気がある涼平と、ほぼ全校生徒に顔が知られている私は、あっという間に噂の的となった。

＊ ＊ ＊

まだ、2時間しか経っていないのに。

“ 神田涼平が弥代椿に『決勝で5点決めたら付き合う』という賭けを提案した”

という噂は学校中に流れていた。すれ違う人はみんな私を見て何かそこそ話しているし、サッカーの相手チームは「神田に弥代は渡さない」という妙な結束力を発揮しているらしい。

「もー！！ 面倒なことばかり！！」

昼休み。実行委員会に仕事を頼まれる前に、クラスの誰かに声を掛けられる前に、私は屋上へ走った。階段を駆け上って、空のターコイズが瞳に映し出されたとき、喉の奥に痞えていたものが一気に叫びあがった。

「賭けなんかで人生初の彼氏つくってたまるかー！！」

自分がこんなに声を大きくして叫ぶことがあったなんて。

まだまだ、私の知らない私がいるみたいだ。

「お前、彼氏いたことないのかよ」

突然、背後から飛び込んだきた声。私はもう驚かない。そこにいるのは、ここを知っているのは、夏だけだから。

「何でここにいるの」

「みんなが探してたよ、椿のこと」

「あたしを？ 何で」

「サッカー、決勝進出だって」

その言葉を、夏が感情を込めずにぶっくらぼうに言うから、夏はこのことをどう思っているのか分からない。

「知ってるよ。サッカーの試合が終わった瞬間に、周りにいた人がみんなして教えてくれたから」

「じゃあ聞いた？ 6対1だって」

「そうなの？」

「決勝の準備運動だって」

「涼平、本気なの?!」

はあ、と声に出して溜め息を吐くと、夏はそれに反応して、言った。

「何、憂鬱って感じ？」

「聞いてたんでしょ。彼氏、いたことないの」

「ああ。それにはびっくりしたな。お前いろんな奴に告られてんじやん」

「夏だって、そうじゃない。野球部のエースでしょ」

「俺は……」

「何？」

夏はそれ以上言おうとしないで、私に「お前はどうかんだ」と、聞き返す。夏の少しだけ短くなった髪の毛が、心地良く吹いた風を受け、一瞬、なびいていた。

「あたしは、決勝で負けちゃって思ってる。相手のキーパーが鉄壁の守りで、1点も入らなかつたらいいのにつて」

「ふーん。涼も喬もダメなんて、お前の好きな奴って、一体どんだけの男なんだよ」

——何言ってるの。目の前にいるじゃない。

「それとも、好きな奴いないとか？ それなら付き合ってから好きになることもあるんじゃないの」

——……ばかにしないで。

「夏には、関係ないじゃない。あたしに好きな人がいてもいなくても、夏が気にすることじゃないでしょ？」

ついムキになって、言うど、夏はこう返した。

「悪い。それもそうだよな。涼も喬も俺の友達だから、応援したくなっただ。でも、そうだよな、俺が言うことじゃなかったな」

その言葉が、夏の気持ちだった。

間接的だけれど、ストレートに、私の心に突き刺さってきた。

お前は友達の好きな女。それだけだ。

そう、夏は言っていた。

24 試合終了。動き出す、桜

午後は男子ソフトとサッカーの決勝戦があつて、クラスメイトは皆、グラウンドに移動していた。だが不運なことに、ソフトの試合途中からサッカーの試合が始まるというスケジュールで、応援はクラスが半分に分かれてすることになった。

サッカーが後半戦に突入し、ソフトが6回表にチェンジするころ、私はサッカーの試合場に向かった。

「椿!! 応援に来たの?」

「決勝見えてきていいよって言われたから」

実行委員長も噂を聞いて、気を遣ってくれたのか、「気になるんでしょ、サッカーの試合。見てきていいよ」と、言ってくれた。そんなこと余計なお世話だと思っただけで、確かに気になっていたの、来てしまった。

得点ボードは1対3の表示。うちのクラスは負けている。けどまだ後半戦は始まったばかりだし、唯一の1点は、後半戦開始と同時に、涼平が決めたものらしい。

「涼平、マジでやる気だよ」

「ね。あ、ほら、3年生相手にメチャクチャ交わしてる」

それが椿のためなのか、単純にサッカーが好きだからかは、分からない。でも、涼平は凄かった。華奢なのに、体格のいい相手を、うまくボールを転がして操っている。

「万緑叢中紅一点、ね」

「え? 何? 『ばんりよくしょうちゅう?』」

「『ばんりよくしょうちゅうこういつてん』。四字熟語よ。知らない?」

「何それ?」

「多くの同じもののなかで、一際目立ってるってこと。ちょうど涼平を見てたら、思い浮かんだの」

「ふうん。椿ってたまに難しいこと言うよね。本当はものすごく頭良いんじゃない？ ってか雑学王？」

あはは、と笑っておいて、細かい追及をされる前に、私は話を振った。

「そういえば、ソフトはどう？ 6回表っていうのしか見えなくて」

「あゝ、さっき聞いたときは4回裏終わった時点で6対2？ で負けてたみたいだけど」

「ふうん。じゃあ今のところどっちも準優勝だね」

「分からないよ。こっから涼の快進撃が始まるんだから。あっほら、1点決めた!!」

「えっ?!」

この際、私は開き直ってしまおう。椿ならきつと、そう思うと思う。

涼平がもし本当に5点入れたとしても、私は賭けを受けた覚えもないし、もともと、そんなこと気にしていなかった、と、言おう。

だって仕方ない。私が好きなのは、夏だから。夏以外の誰か、なんて、私は望んでないし、いらないのだ。

夏に恋をしているとはつきり自覚してから、私の心には、迷いなんてなかった。

たとえこの先のことを予想していても、それさえも受け入れて、夏のそばにしようと。

* * *

サッカーの試合が終わった後に、ソフトの試合を見に行った。ちようど終了の挨拶をしていたところで、戻ってきた両チームの表情

から、試合結果が分かってしまった。

9回裏で終了。6対5で、3年5組の勝ち。

「お疲れさま、夏」

「椿、来てたんだ」

ベンチに座る夏の額に買ってきたスポーツドリンクをコツツとぶつけると、夏は冷たそうに顔を振った。ベンチの後ろに立つ私のほうに体を少しだけ向けてくれた夏は、「これ？」と、聞いた。

「サッカー見てたから応援できなくてごめんね、の、お詫び」

「ああ、サッカーも終わったんだ」

夏は膝に落ちたそれを手に取って、一気に飲む。横顔の夏の、ゴクンゴクンと飲み込む度に鳴る喉が妙に色っぽくて、切ない。

「残念だったね、試合」

「うーん。あと少しだったんだけどな。俺まで打順が回ってれば、絶対同点に持ち込んだのに」

「ピッチングは？」

「やっぱソフトは難しーな。俺、野球ばかりだったから、ソフトもやっとけば良かったって後悔したよ」

「でも、かっこ良かったよ」

「嘘。見てなかったんだろ」

「見てたよちゃんと。夏が、投げてるどころ」

サッカーの試合を見に行く前に。見てきていいよと言われて思いついたのは、夏のことだったから。

結局はクラスメイトに見つかって、「椿はサッカーで涼の応援してあげなよ!!」と言われてしまったのだけだ。

「凄かった。かっこ良かった。本当だよ」

「分かったって。お前、そんなこと言うキャラじゃないだろ。どうしたんだよ」

「変わっていくの。本当のあたしは、こうだもん」

私はきつとこれから、変わっていく。

夏を好きな気持ち、もう、抑えていられないから。

夏のそばを離れるときまで、私は、私を、夏に見つけてもらえるように。

「ねえ、夏。屋上に行こうよ」

「え、今から？」

「今から。もちろん」

あんなに、ばれないように気をつけてきたのに。

今はこんなにも、夏に私を見つけてほしくて。私に気づいてほしくて。

夏にだけ、私は私のままで、桜として生きようと、思った。

25 試合のあとのハーフタイム

そして私たちは、いつもの屋上にいた。

いつもと違うのは、2人が一緒に歩いて、屋上に入って来たこと。

「それで、サッカーは？」

「気になる？」

「当然だろ。うちのクラスの優勝がかかってるんだ」

「……ちえっ」

小さく声を漏らすと、夏は「何だよ」と、言う。

ああ、私はこんな人間ではなかったはずだ。こんな風に自分の感情を素直に、露にするような、恋心をはっきりと相手に伝えるような。そんな女の子ではないと、思っていた。

「サッカーも、負けたよ。5対6。惜しかったの」

「5点、入れたんだ」

「そう。涼平が出場した後半戦にね」

「それって、」

夏がそこまで言うのと、私はふっ、と笑みをつくって、夏のほうを見た。夏が言おうとしていたことを、私は、分かっていた。

「涼平が入れたのは、4点。1点はね、オウンゴールだったの」

蹴ったボールが相手チームの足に当たり、予期せぬことに反応できなかったキーパーをするりと抜けて決まったゴール。間抜けなものだけれど、ゴールはゴール。

だけどあと1点を、涼平は、決めることができなかった。

「あと1点入れてれば、あたしに言った賭けもクリアして、同点になって、PKで勝ってたかもしれない。試合が終わったあと、涼平のほうから言ってきた。『賭けは無効にしてくれ』って」

もちろん私は初めからそのつもりだったけれど、涼平から言われたら、「いいよ」としか、言えなかった。涼平は悔しそうに下唇をきゅっと噛んで、瞳には涙のようなものが滲んでいた。

「ふーん、良かったじゃん。付き合うつもりなかったんだろ」

「うん。でも、涼平は本気だった。本気で、プレーしてた。それを見てて気づいたの。涼平は、本気であたしのことを好きだったのかも、って」

「うん。俺も、そうだったと思う。涼は、普段はふざけてるけど、冗談であんなこと言えない奴だから」

そのあと私たちに会話はなく、ただ、梅雨が去ったあとの清々しい夏の青空を、2人、思い思いに見つめていた。

* * *

その日の夜、クラスマッチのお疲れ会をすると乃李から聞いて、椿に「行って来たら」と言ったのだけれど、あたしはいい、と言われてしまった。

「桜が行って来なよ。あたしはクラスマッチに参加してないし、話しても分からないから」

「でも、椿だってみんなに会いたいんじゃない？」

「あたしはいいの。だってあたしは今、桜だもん」

「んー分かった。じゃあ、あたしが行くからね」

玄関で私を見送ってくれた椿は、家を出る私に、言った。

「桜、何か変わったね。前はあんなにあたしのクラスのこと嫌がってたのに。全然いい。今の桜のほうが、全然いいよ」

椿の目から見ても、私は、変わっているんだ。

「あたしもね、今の自分のほうが、自分らしいと思う」

夏のことが好きで、気持ちを抑えられずについ衝動的になってし

まう女の子。

たぶん私は、これが本当の私。

「じゃあ行ってくるね」

「うん。みんなと、夏にもよろしくね？」

椿は色付きはじめた私の心を見透かしたようにいたずらに笑って、手を振った。

26 閉幕の夜

「あつ、椿遅いよ」

午後6時。お寺の息子だという秀治の家にクラス全員が集まって、私が着いたころには、もう宴会が始まっていた。

「ごめんね」

実はここに来るとき、道を迷ってしまって、遅くなった。秀治の家で騒ぐのはよくあることらしく、椿もここに來たことが何度かあったから、「迷った」と、友達に電話で聞くこともできなかったのだ。

「それじゃあ改めて、クラスマッチお疲れさまー!!」

最終結果。総合で、全24クラス中、うちのクラスは第3位だった。

「明日、表彰式だから、代表者決めておいてね。5位までには賞品が出るんだよ」

私がそう告げると、みんなは大喜びして、代表者を選び始めた。なぜか話の途中に「椿にしたら」という声が聞こえたが、私は生徒会役員として、朝礼の司会をしなければならなかった。

そのうち「夏でいいじゃん」と誰かが言って、みんながそれに賛成した。こんなにやる気になったのは夏が盛り上げてくれたからだ、と、満場一致で決まった。

明日、私が夏の名前を呼ぶ。「第3位。2年1組代表、入来夏」と、私が言って、夏が返事をするのだ。こんな些細なことが、単純に嬉しい。明日私は――。そう考えるだけで、頭の中でシュミレーションするだけで、胸の奥がジリジリと焦がれていくのが分かった。熱くなったそこから、感情が外に押し出されてしまいそう。焦がれて、焦がされて。導火線もなく、心には、すぐに火がついてしまう。私の中の隠された情熱が、めらめらと燃えている。この気持ちは一体、どこへ向かうのだろう。

私はまだ、知らなかった。恋心には、自分でさえもコントロールできなくなるほどの、“狂気”が含まれているのだということを。

＊ ＊ ＊

みんなが境内に出て花火をやり始めた。楽しい雰囲気になって、そろそろバラつき始めている。何組かのカップルは、すでに姿を消していた。

「はあゝ」

私は境内の階段上に座って頼杖をつき、花火を眺めていた。ぼーっと、いろいろなことを考え、想いを巡らせながら、花火が光り、消えていくのを、目に映していた。

そこへ、隣に座ってきたのは、夏だった。

「よお」

「夏」

「椿は花火、やんないの？」

「あたしは、ちょっと疲れちゃったから。夏はどうして戻ってきたの？ あっちで花火やってたじゃない」

私が指差したほうには、喬と涼平がいた。2人とも、こっちには気づいていない。

「椿がひとりでいるの見たから。今がチャンスかなって思って」
「チャンス？ 何の？」

そう言うと、夏は立ち上がって私の手を引き、境内の裏のほうへ静かに走った。誰も、私たちには気づかない。

「夏。何、こんなところに引っ張ってきて」

「2人で話したいことがあったから」

夏の言葉に、心が脈を打つ。ドクン、ドクン、とうなずいて、そ

の度に短い夢を見る。

2人きりで、何を話したいのだろう。

私を強引に連れ出して、どうしたいのだろう。

「あのさ、」

夏が切り出して、私ははっとした。短い夢は期待へと姿を変えて、胸を大きく膨らませる。

「何？」

「おせっかいなのは分かってるんだけど、やっぱり気になるからさ。喬も涼も椿のこと好きだって。だから、はっきりしてやってよ」

恋は狂気。恋は錯乱。

心は制御不可能に動き出す。

27 伝わらない想い（前書き）

桜が大爆発！！の回です。

ベラベラ早口で言う感じを書いたので、少し読みづらいかも……？

27 伝わらない想い

私の中の狂気が、火事場の煙のように、もくもく、むくむくと、現れた。

「夏は、本当に友達想いだよね。そういうところ、いいと思うよ。みんなが夏を好きで、夏の側にいるの、よく分かる」

夏が「え」と声を上げるその前に、私は、言った。

「でも、それって無責任、身勝手。友達のためなら何してもいいの？ 2人のためなら、あたしに何だって言えるの？」

「椿？」

そのとき私は、妙な使命感を抱いていて、夏が何か言う前にすべて話し終えなければいけないと、思っていた。そんな必要はまったくなかったと、気づくのは、私がそこを去ったあと。夏の発言への憤りもプラスして、私は、手のつけようがない、壊れた玩具のように、ただひとつのことだけを思って、動いていた。

——夏は私のことなんてちっとも考えてくれていないし、私を見つけてくれていない。

「あたしは、喬に告白されたとき、『付き合えない』って、言ったの。これ以上『はつきり言う』って、どういうこと？ 『喬なんか好きじゃない』って、言えばいいの？ ねえ、そう言えばいい？」

夏がそうだっていうなら、今すぐ言ってくるけど」

「椿。俺は、そんなつもりじゃ、」

「そんなつもりじゃない、って？ じゃあ何なの。涼平にも『あんな賭けは卑怯だ。勝手すぎる』って言えばいいの？ 言えるよあたしは。だって心の中で、あたしは本当にそう思ってたもん」

自分を繕うことなんて、もう、できない。

夏は、あまりに軽率にそんなことを言う。鈍感、という言葉では

済まされないほど私の心に鋭い刃を突き刺して、それでもまだ、何も分かっていない。分かって、くれない。

「椿。どうしたんだよ、お前」

夏は、困った顔をして、私を見た。

「夏、は、あたしのことは何も考えてくれないんだね……」

そう言った私を見て、夏が「え」と呟いたのをきっかけに、今までのことすべてが、どうでもよくなった。

「もういい。夏、もう、いいよ」

「え、椿……？」

夏の横を通り過ぎ、私は歩き出す。

「おい、椿！！ お前、どうしたんだよ」

「椿なんて呼ばないで！！」

その愛しい声で、私を、「椿」と呼ばないで。

「お前なんて、呼ばないで。あたしは……」

私は桜。椿じゃない。お前、なんて呼ばれるほど、夏は私のことを知らない。

「ばいばい。夏」

一度だけでいいから、「桜」と、呼ばれたかった。

それが叶わずに夏の元から離れることを、どうかこの先、後悔し
ませんように。

28 恋心、消失

「ええっ?! どういうこと?!」

「今言った通りよ」

「何でそんなこと言うの?!」

「だから、今言ったでしょ」

「『もう二度と入れ替わらない』なんて、それだけじゃ分からないでしょ」

夜、午後10時ごろに家に着いて、その足で椿の部屋に向かった。ノックをせずに部屋に入って、驚いた椿に、言った。「明日から、もう二度と入れ替わらないから」と。

「ねえ、どういうこと? 何かあったの?」

椿は私の前に立って、私の肩をぐっと掴んだ。

「……別に。ところで椿は、見つかったの?」

「え?」

「会いたい人に、会えた?」

そもそも入れ替わりの始まりは、椿が私の学校で会いたい人がいて、その人を見つけること。初めから、私は望んで入れ替わりをしたのではない。椿の願いが叶えば、入れ替わりは終わる。

「実は、今日会えたの」

「今日?」

「そう。今日初めてあの日以来再会して、少しだけ、話すことができたの。『明日も会える?』って聞いたたら、『さあね』って、笑ったの。明日も来てくれるかもしれない」

椿は今日のことを思い出し、嬉しそうに顔を綻ばせた。正直、椿のこんな可愛い表情は初めて見たので、ドキリとする。もしかして私も夏のことを想うときは、椿と同じ顔をしているのだろうか。

ま、もともと同じ顔だけど。

「ねえ桜。あたしの恋は始まったばかりなの。だからお願い。入れ

替わりやめるなんて言わないで」

恋心の始まり。ドキドキが募って、心が支配される嬉しさと、そばにいられることの喜び。

私も、それを知っている。椿の気持ちは、私が経験したものと同じ気持ち。

だけど、ごめんね。私はもう、そのあとの、恋の辛さを知ってしまった。痛くて、哀しくて、今のところ立ち上がり不可能。

「できないよ、椿。すべてなかったことにして、お互いの、前の生活に戻ろう」

「桜……」

すべて、なかったことに。

夏と過ごした時間。夏を好きだった私の恋心。すべて、私の中からなくなればいい。

そうすれば、今はまだ流れない涙も、夏への想いとともに、ぼろぼろと零れ落ちてくれるだろう。

29 夏の引力

明日だけではどうしても行きたい。そう椿が言って、私はそれを承諾した。椿の気持ちは痛いほど伝わってくるし、その気持ちを、私も知っているから。

次の日の朝。椿が登校して、その10分後に私も家を出るのだが、10分過ぎて、20分過ぎても、私は家にいた。母はとくに家を出ているし、今日は月一恒例の反省会だから、帰りも遅い。椿には部活の助っ人をやらずに帰ったと言ってしまうえば、それが事実になる。

「学校サボるのなんて、初めて」

椿から聞いた乃李のメールアドレスに「具合悪くて休むから先生に言つといて」と、家のパソコンから送っておいた。椿も学校をサボったことなんてないし、先生の信頼も厚いから、友達から欠席を告げるのでも大丈夫だろう。

椿が私の学校へ行ってしまったから、私には行く場所がない。

椿の学校は、もう、私の行くべきところではない。

夏には、会えない。

* * *

午後3時をまわって、そろそろ学校が終わった時間。有意義というよりも、無機質だった今日。こんなに暇を持て余したのは、初めてのこともかもしれない。

「学校って、楽しかったんだ」

サボってみて、分かった。いつも友達に囲まれて、生徒会の仕事に追われて、部活の助っ人を頼まれて――。そんな毎日。忙しくて、疲れる毎日。だけどすごく充実していて、楽しい時間だった。いつの間にか私の生活の一部になり、私の習慣になっていた。

――ああ、あたし、楽しかった。このままこんな日が続けばいいなって思ってた。

過去を後悔するのは、それが、戻らない時間になってしまった証拠。

私の生活は、また、前と同じ日常を取り戻していくのだと思っていた。

ピンポーン　ピンポーン

そこへ、インターフォンが鳴った。椿、ではない。椿なら、そのまま家に入ってくる。

モニターなんて便利なものはないので、仕方なく玄関で、「どなたですか」と声を張る。ドアの向こうには確かに人の気配があった。相手はひとつ、黙ったあとに、

「あ、俺……。入来、夏だけど……」

躊躇いがちにゆっくりと話す、夏の声が聞こえた。

＊　＊　＊

二度と会えないと思っていた。

二度と声を聞くことだってできないと、思っていた。

「夏……?!」

私は驚いて、思わず、声に出す。

「椿、だよな。やっぱり家にいたんだ」

「夏。何で、ここに？」

「直接会って話したいことがあったんだ」

そう言って、夏は黙った。私がドアを開けるのを待っているのだろうか。だけど私は、ドアノブに手を掛けたのに、それを開けることができなかった。再び夏と向かい合ってしまったら、私の心はもう一度、夏という引力に絡め取られてしまうと思った。折れそうで、なのに折れない不安定な心。きつと、一瞬で、夏の元に戻ってしまう。

「何、話したいことって」

「あ、いや、あのさ……。今日、休んだのって、俺のせい？」

「え？」

「ほら昨日、俺、無神経だっただろ。椿にばっか、責任みたいなの、押し付けて。椿だって大事な友達なのに、考えてなかった。本当、ごめん」

今さらそんなこと言われても、もうどうしようもない。

そう思っているはずなのに。夏と、向かい合ってさえないのに。

——どうしよう。

この声が。この、ドア越しに伝わる、存在感が。夏のすべてが。

私を狂わせる。もう一度、夏の元へ。ふらふらゆらゆらと彷徨いながら、視点は確かに夏のほうへ、はつきりと向かっている。

30 双子、それぞれの恋

「学校休んだの、夏のせいじゃないよ。朝から気分が悪かったの。クラスマッチもあったし、熱中症だと思う。変な気遣わせてごめん」
結局私は、夏に、あなたのせいだ、と言えなかった。だって考えてみれば、夏だけが悪いのではなくて、勝手に夏を好きになって、夏の言葉に傷ついている、私だって悪いのだ。むしろ、夏は何も悪くない。

「ごめん、夏。本当に、ごめんね」

「いや、そんな謝られても困るし、俺も悪かったと思う。ごめん」
「謝らないでよ。夏は何もしてない」

「あ、そうだよな。これ以上謝っても、しょうがないよな。それより具合、大丈夫なのかよ。明日は学校来れる？」

もう二度と、夏には会わないと思っていた。入れ替わりは昨日で最後。椿の学校に行くことは、もう、ないと。

「……うん。明日、行くよ」

「そっか。絶対来いよな。俺もみんなも、椿が来るの待ってるから」
「あたしが行ってもいい？」

「お前しかいないだろ」

「あたしが、行ってもいいのね」

「だから、そう言ってんだろ」

「うん。今日ありがとう。夏が来てくれて、嬉しかった」
「な、なんだよ急に。じゃあ俺、帰るわ」

「見送りできなくてごめん。また明日ね」

「ああ。じゃあな」

去っていく夏の足音がやけに響いて、私の心と同じ音を刻む。ドクン、ドクン、と、いつもより早足で、だけどそれが心地良い。

「夏。あたしが行っていいんだよね」

椿が来るのを待っている、と、夏は言った。でも私（桜）が行ってもいいかと聞くと、夏は「当然だ」と応えてくれた。

こんなの、卑怯で、自分よがりなことかもしれないけれど。

「あたしが、行くからね」

椿ではなく、私が。もう一度だけ、桜はあの学校に行く。

次に夏に会うときは、真正面から向かい合って、ちゃんと、話せますように。

* * *

午後6時を過ぎて、ようやく椿が帰ってきた。おかしい。うちの学校は今日からテスト週間に入ったばかり。部活もないのに、帰ってくるのが遅すぎる。

「椿、おかえり。どうしたの、こんなに遅くまで、何をしてたの」
玄関まで出迎えた私を素通りして、椿は階段を上がった。おかしい。学校から帰ると、椿はキッチンに向かうはずなのに。

「椿。どうしたの？ 何かあったの？」

私の問いかけに、椿は振り向かず、答えた。

「大丈夫、何でもないの。ちよつとやらなきやいけないことがあるから、ひとりにして。夕飯になったら、ちゃんと行くから」

「……そう。じゃあご飯ができたら呼ぶからね」

うん、と答えたのかさえ聞き取れないような微かな声。椿が部屋のドアを閉めて、物音が聞こえなくなった。

——椿。“また”泣いてるの？

あのときと同じように。

罰ゲームで夏に告白して、本気で失恋してしまったあのときのように、椿は、泣いているのだろうか。

大丈夫、何でもない――。あれは、椿が泣きたいときに使う言葉だから。

* * *

「そっかぁ。お母さん、今日は遅い日だったね。あたしいつも忘れちゃう。ごめんね、桜にご飯作らせて」

「いいよ。どうせ椿はいつも手伝ってくれないし」

「あゝひどいっ。あたしだって食器出したりしてるでしょ」

「大皿出してって言うど底の深いボウル出すじゃない」

学校から帰ってきてまだ1時間くらいしか経っていないのに、椿はすっかりいつも通りに戻っていた。真っ赤に腫れたはずの目も、そこにはない。

椿は本当に泣いていたのだろうか。それさえ感じさせないほど、いつも通りの椿。だけど私には分かっていた。椿は確かに泣いて、今もその哀しみを、心に負っている。

「……ねえ、桜」

「なあに？」

「今日、学校に行かなかったでしょ」

「えっ？」

「別に隠さなくてもいいよ。桜はもう入れ替わらないって言ったのに、今日は無理矢理あたしが頼み込んだんだもんね」

椿がそう言って、隠せないと、悟った。

「どうして分かったの？」

「喬とか涼平とか、メール来たよ。『具合大丈夫か？』って」

しまった。そこまで私は考えていなかった。乃李にはパソコンで送ったから、返事もパソコンに來たけれど、まさか、他の人から連絡が来るとは思わなかったから。

「桜、ごめんね。あたしいろいろ、桜に押し付けてたんだね」

「え？」

「メールで、言ってたよ。『クラスマッチのときに言った自分の気持ちに嘘はないから』って」

「……そっか」

「ごめんね。あたしが入れ替わろうなんて言ったから、クラスマッチの実行委員の仕事も、喬と涼平のことも、桜が背負うことになったんだよね」

椿はいつになく、真剣で、哀しい目をしていた。

「椿、どうしたの？」

そう聞くと、椿は俯き気味だった瞳に私を映して、言った。

「桜。あたしも、もういい。入れ替わりごっこは終わりにしよう。」

桜の言った通り、前のあたしたちに戻ろう」

その淡い瞳に映していたのは、本当に、私だったのだろうか。

30 双子、それぞれの恋（後書き）

もうすぐ七夕なので、「くように」という表現を密かに入れています。

そこも注目していただければ……

31 恋心の共有

椿が入れ替わりをやめようなんて言うと思わなかったから、私もまさか自分がこんなことを言ってしまうなんて、思わなかった。

「だめだよ椿。諦めたらだめ。夏を好きだったとき、後悔したんでしょ？ 好きになってもらえるように努力してたら良かったって、思っただんでしょ。それならだめよ」

夏を諦めようと、椿と同じように思った自分。だけどそんなことは今私の中にはなくて、ただ、椿には、諦めるなんてしてほしくなかった。

「何があったかなんて、あたしは知らないよ。でも椿、諦めないで。もう一度だけ、学校に行って」

「……でも、それじゃ桜は……」

「心配しないで。今日みたいに学校休んだりしないから」
「え？」

夏にも言った。自分でも決めた。明日は学校に行く、と。

「あたしも明日、もう一度だけ行ってくる。そして、夏に言うてる」

学校に行く決めてから。いや、夏が会いに来てくれたときから、そうしようと思っていた。

「あたしは椿じゃない。あたしは、桜なんだって、夏に、言うから」
もう隠していられない。恋心は、ブレーキを壊してしまった。

＊ ＊ ＊

次の日の朝、お互いの健闘を祈るように、そして今日で最後にな

る入れ替わりを少しだけ惜しむように、2人揃って制服を着た。ネクタイを締めるときは、入れ替わり初日のあの騒動を思い出して、2人顔を見合わせて、笑った。

昨日の夜、椿は何かあったのか話さなかった。結局私だって何も話していないから、これでおあいこ。今日学校から帰ってきたら、きっとお互いのこれまでの報告会をするだろう。

私は夏に、すべてを話すと決めた。

椿は3回しか会ったことのない彼に、告白すると、決めた。

私たち双子は、初めて恋心を共有した。恋する喜び、恋した辛さ。私たちは同じ気持ちを抱えて、同じ痛みを慰めあって、もう一度頑張ろうと、2人で決めた。

それがどんな結果になろうと――。2人の恋の行方が違うものになったとしても、私たちは、これで良かったのだと思う。

桜と椿は双子。だけど、桜と椿は、違う人間だから。

32 嘘つきは別れの始まり

朝からいろいろなことを考えていた。「おはよう」と挨拶を交わせば、もうこの人たちと会うことはないのだと思い、部活の助っ人を頼まれれば、今日でこれも最後なのだと思った。

そんなことばかり考えていたから、心はすっかり感傷に浸ってしまっ、みんなを見る私の顔は、相当ひどいものになっていた。

「何がそんなに悲しいの」

「何、その苦笑い」

そんな風に言われて、初めて気づいた。心から笑っていない自分の、無理に繕った顔。私は、この学校が好きだった。初めての友達も、学校生活も、楽しかったものすべてを再び失ってしまうことを、哀しく思っている自分がいた。

「だめよ。だめ。椿にすべて、返さなくちゃ」

私を変えてくれたものたち。きっとこれから、私は私の学校で、同じものをつくっていけるだろう。

私の本来いるべきところは、私の居場所は、ちゃんと、別にある。

ここではない、夏のいないところに。

* * *

屋上には、今日もターコイズの空が広がっている。

「よ」

「よ」

「ちゃんと来たな」

「え？」

「もうここには来ないと思ってた」

「どうして？」

「別に、理由なんてないけどさ」

最後に。夏と向き合える最後のときになって、知ってしまった。理由なんてない、は、答えに困ったときの、夏の口癖。

「……ねえ、夏。ひとつ聞いてもいい？」

「何？」

「前に、信じてた人に嘘をつかれたって言ってたよね。それは、どんな嘘だったの」

昼休みは、時間がなかった。躊躇している場合ではない。言うべき言葉は、すぐに伝えなければならなかった。

そのためには、夏がどの程度の嘘を許せるのか知っておく必要があった。もしかしたら私と椿がついてきた嘘も、夏は笑ってくれるかもしれないと思ったから。

だけど、そんな考えはすぐに打ち碎かれた。

「……それを、椿に言われるとは思わなかったよ」

「え？」

「お前、覚えてないの」

不思議な感覚がした。

そこにいる夏は、夏ではないようで。

「お前が俺についた嘘、俺はずっと、忘れない」

黒くて円い、夏の瞳の真ん中に、私は映し出されていた。

33 嘘つきの真実

「椿。俺はお前が好きだった」

最後に、夏はそう言った。

* * *

「椿……が、ついた、嘘？」

身に覚えがないのは、きつと、私が椿になる前のことだから。つまり椿が、夏に、嘘をついたということだ。

「いや、嘘って言わないか。でも、俺が知らなかったら騙されてたんだから、同じことだよな」

「どういうこと？」

本当に分からないという顔を見ると、夏は、私がそのことをすっかり忘れていたと思ったのか、怒りと呆れを含んだきつい口調で、言った。

「お前にとってはその程度のことだったんだよな」

強い風が吹いた。ビュウッと一筋、ものすごい勢いで私の体を突き抜けて、ちょうど同時に振りかかってきた夏の言葉だけを、心の中に置き去りにしていった。

「去年の夏だった。夏休み直前の日の昼休み。部活のミーティングが終わって、椿を呼び出そうとして向かった教室で、椿は、みんなに囲まれてた」

聞いているだけしかできないと思っていた、私の知らない椿と夏の過去。だけど頭の中で、前にも同じような情景を思い浮かべたことがあると、気づく。

去年の夏の、昼休み。教室で、椿は友達みんなと――。

「廊下から、ちょうど匡基の声が聞こえてきたんだ。盛り上がる輪の中心にいたのは、椿だった」

夏のいない輪。突然の匡基の声。それは、確か――。

＊ ＊ ＊

「はーい、負けは椿。罰ゲーム決定!!」

「ええっ、マジ?! 罰ゲームって何なの?」

「発表しまーす!! みんなで考えました。罰ゲームは……夏に告ってきてくださいー!!」

「よし!! じゃあ早速行ってくるね!!」

「おお。椿めっちゃやる気じゃん!!」

「サクッと告ってサクッと恋人になってくるから!!」

＊ ＊ ＊

「罰ゲームの、告白……?」

「思い出したのか。そう、俺はあれを、廊下で聞いてたんだ」

「え……」

夏が知っていた。椿から告白されることを。その告白は、罰ゲームだったのだと。

だけど、夏は知らなかった。罰ゲームは単なるきっかけ。椿は本気で夏を好きだったのだということ。

「高校に入ってすぐに仲良くなったのが、椿だったよな。お前になら何でも話せたし、一番、居心地が良かった。そんな椿から、まさか、俺を騙すために告白するなんてこと、聞くとは思わなかったよ」みんなに冗談と思わせるために、わざと明るく振舞った椿。その、サクッと告ってサクッと恋人になってくるという言葉が、夏の疑心をさらに強くさせてしまった。

「……本当はあのとき、俺も椿を呼び出すつもりだったんだ。夏休みになる前に、言っておこうと思ってた」

「え？」

「椿。俺はお前が好きだった。本気で、告白しようと思ってた」

33 嘘つきの真実（後書き）

中途半端ですが、次回に続きます。

34 熱（前書き）

終わりそうでなかなか終わりませんが、
もうしばらくお付き合いいただけると嬉しいです。
さて！！今日は新たな登場人物が！！

34 熱

もしかしたら夏は、1年越しの告白に私が何て答えるか、待っていたのかもしれない。

だけど、私は逃げ出してしまった。その場にいたことが恐くなって、何も言えずに、すぐ後ろにあった階段を駆け下りた。椿、と夏が呼ぶ声もすぐに遠ざかって、教室を通り過ぎ、人気のない理科棟で、走りを止めた。

「はあっ、はあっ」

喉が潤いを求めて、きよろきよろと目を泳がせる。額には汗が滲んでいた。

「……逃げてきちゃった」

逃げたって仕方ないのに。この昼休みが終われば、5限目、また教室で顔を合わせなければいけないのに。

「どうしよう。教室に行きたくないよ」

髪をくしゃっと掻くと、額の汗が手の甲にうつった。心の熱が飛び出してしまったよう。汗は、とても熱かった。

――夏。どうして、あんなことを言ったの。

1年前のことなんて、今さら。どうして、今さら。

* * *

まもなく昼休み終了のチャイムが鳴ると、足がすくんで、動けなくなってしまう。さあ行かなくちゃと思っているのに、心が、指

令を受けつけてくれない。

「やだ。早く行かないと、授業が」

そうしているうちに、チャイムは2度目の音を鳴らした。短い移動の時間さえも終わってしまっていた。

しん、とした理科棟は、5限目は使われないらしい。相変わらず人気がなく、私ひとりが地団駄を踏む姿だけが、眩しい陽射しに当てられて、ガラスに映っているだけ。

「誰も、いないや……」

何で私はここに、いるのだろう。うろたえる自分は、酷く滑稽に見えた。

するとそこに、私以外の誰かの、カツン、と鳴る、靴の音がした。「おいそこ、何してる？」

声に驚いて振り向くと、眩しい方向に白衣が見えて、それが保健医だと気づいた。名前は確か……さっきまでの衝撃で、どうやら忘れてしまったみたいだ。

「あ、えっと……」

「お前、2年の弥代か。何でこんなところにいるんだ。チャイム鳴ったろ」

「いえ、あの……」

頭がふつ、と、軽くなる。

「あ」

「……え？」

そのときのことを、私はあまりよく覚えていない。

だけど、ひとつだけ、確かに覚えている。「急に倒れたんだよ」と後で聞かされたときに思い出す、先生に抱き締められた腕は、私の額に滲んだ汗のように、熱かった。

35 保健室に2人

夏と付き合うことになった。どうしてそうなったのかはまったく分からないけれど、私と夏は、クラスのみんなにからかわれながら「そうだよ付き合ってるんだよ」と、2人で繋いだ手を見せびらかした。喬も涼平も笑ってくれて、私と夏は、顔を見合わせて、幸せだね、と頷く。

そんな夢を、見ていた。

＊ ＊ ＊

「おう、起きたか」

ゆっくり目を開くと、陽の光が眩しくて、またすぐ瞼を下ろす。窓辺から顔を背けると、目の前には保険医の姿があった。

「ここ、保健室ですか……？」

「ああ。もうすぐ5限が終わるころだ」

「え？」

「理科棟で急に倒れたんだ。覚えてないか」

確かに、この先生と会ったのは覚えている。だけどそのあとに起こったことは何も――。ただ、私の体には、誰かの腕に抱き締められたらしい温もりが残っていた。

「倒れたって、先生がここまで連れてきてくれたんですか？」

この、服の上からも感じる温もりは、先生のものなのだろうか。

「いや、俺じゃない」

「え？」

「ちょうど入来がいたから、あいつに運ばせた。野球部だし俺より力ありそうだったからな」

「……夏が、」

無意識に、腕が肩へと伸びた。抱かれたこの温もりは、夏のもの。夏の熱が、私の体に染み込むようにして残っている。

私を運んでくれた夏は、すぐに教室に向かったらしい。椿をよろしく願います、と、丁寧に頭を下げていったのだと。

——夏が、あたしを。

さつき、屋上であんな風に話したばかり。しかも私はそこから逃げ出して、だけど知らないうちに、夏の腕に抱かれた。なんて恥ずかしいことを、してしまったのだろう。これでもう本当に、夏に会わせる顔がない。

「先生」

「あ？」

「名前、何でしたっけ？」

今さらかよ、と言いつつ教えてくれた杏堂先生。^{あんどう}ぶっきらぼうで、保健医のくせに他人に興味のなさそうな態度は、夏とまったく正反対。それがなんだか可笑しくて、思わず笑ってしまう。

「何笑ってんの。具合良いなら帰れよ」

「だって先生、保健医のくせに清潔感ないんだもん。遊んでそうだよ」

「おいこら。俺は一応先生だぞ」

「だからちゃんと先生って呼んでるじゃないですか」

「お前なあ、」

先生は呆れた顔をして、だけどそのあと、ふっと口元を緩ませて、笑った。

「ほら、さっさと教室戻れ。ちょうどチャイム鳴ったぞ」

5限の終わりを告げる爽やかな音楽。私にはそれが、警告音に聞こえた。まるでシンデレラの、午前0時の鐘のように、遠くの方で鳴っているのに、耳元にまでその存在を示している。

「……安堂先生。あたし、6限もここにいちやだめですか？」

「あ？　ここはサボリ場じゃないんだよ」

「6限は体育で、マラソンなんです。もしまた貧血でも起こしたら、先生の監督不行き届きですよ」

脅しかよ。そうやって先生は、デスクのほうに向いて、私から目を逸らした。ここにいてもいいということなのだと、私は勝手に解釈して、再び、ベッドに体を預けた。

柔らかいシーツの清潔な匂いに包まれる。この先生が毎日シーツを洗濯をしている姿を想像するとまた笑えて、陽射しの気持ちいい午後に、少しだけ、気分が持ち上がった。

「先生。暇だから、話しませんか？」

「俺は忙しいんだよ。サボリ生徒の相手してる暇はない」

「うそ。保健医って怪我人がいなきゃ仕事ないじゃないですか」

「いろいろあるんだよ、大人はな」

「子供だって、いろいろありますよ」

そう言うと、先生から溜め息が聞こえた。もしかしたら聞こえるようにわざと、大きく言ったのかもしれない。

しょうがないな、というように、再び私のほうに椅子を回してくれた先生。夏と正反対のこのひとは、このひとだったら、私の嘘をどんな風に受け止めてくれるのだろう。

「ほら、話してみろ。弥代椿」

直感で、このひとは大人だと、思った。

出会ったことのない、大人の男のひとだ、と。

36 本当の自分

「先生……。ここ、学校だよ」

「分かってるよ」

「こんな……ところで、こんなことしちゃ……」

「大丈夫。誰も来ないよ。今は授業中だ」

「だって、もしかしたら誰かケガして」

「もう黙って」

「あ」

先生の手が、私の髪に触れる。上から下へ、するっと撫でられた髪がくすぐったくて、ビクツと肩を震わせると、それに気づいた先生が、笑った。

「何、緊張してるの」

「そ、なんなんじゃ、ないですけど」

「だったら力抜け」

「……はい」

チヨキン!!

「あゝ!! ほんとに切ったゝ!!!!」

「何だよ弥代。お前が髪切りたいて言っただろ」

「だからって、『俺が切ってやろうか』なんて冗談だと思ったんです!!」

他愛もない子供のころの話をしていた。小学生の自分はどうだったとか、どんな遊びをしていたとか、何が流行っていたとか。取り留めのない、どうでもいいような話を、していた。

その流れで行き着いたのが、“将来の夢”。先生は「美容師になりたかった」と言った。

「中学生のときまでは美容師って職業がカッコいいものだと思って

たから、男友達と美容師目指そうぜって言ってたな。自己流だけど、それなりに専門的なことも勉強してた。だけど、何でだろうな。自分でも気づかないうちに保健医なんかになってた」

きっと自分を変えた出来事があったんだろうな、と、先生は続けた。それがどんなことだったかは忘れたけれど、それによって本当の自分を見つけた気がした、と。

「でも、先生が美容師になってたら、きっと人気になってたと思いますよ。あたしも先生に、髪、切ってもらいたかったかも」

半分はからかってやろうという気持ち。もう半分は、先生の言葉に共感できたから、敬意を称して言った、つもりだった。

「じゃあ、今から俺が切ってやろうか」

なんて先生が返してきても、私がからかっているのに気づいて、冗談で言っているのだと思っていた。

それが、本当に、切ってしまうなんて。

「ここだけ短くなってるじゃないですか」

「これから揃えるんだよ。ほら、喋るなって言ってるんだろ。頭が動くんだよ」

ジャキン！！

「あゝ！！」

静かなはずの、静かでないといけないはずのところで、私たちは騒いでいた。隔離された別空間にある保健室は、私と先生以外、誰もいない。

15分後、始めに短く切られたよりもさらにもう少しだけ短く、全体がカットされた。中学生の自己流の割には上手な揃えめ。夏が近づいてきてうっとおしかった重たい髪は、丁寧^すに梳^すかれた。

「先生、やっぱり美容師でもやっていけたかも」

消毒液の並んだガラス棚に近づいて、髪を梳といてみる。綺麗に段のついた髪筋が、流れるように、つまんだ指からすり抜けていった。「そうかもな。でも、たぶんそれは美容師だけじゃない。手先が器用だから、大体のことはそつなくこなせると思う。それでもやっぱり、保健医って仕事には敵わなかったな」

私には保健医としての仕事のやりがいとか、良さとかは全然分らないけれど。

きっと、人にはそれぞれ夢中になれる、本当の自分になれる時があつて。

それが、先生にとっての保健医という仕事だった、ということなのだ。

「先生。あたしも、自分が本当に夢中になれるもの、知ってます。今まで自分はそれなしでどうやって生きてこれたのか、不思議に思えるほど、大切なもの。あたしも見つけました」

先生は私の瞳を見つめ、見透かした。その視線の先に、瞳の奥に、私が思い描いているものを、見つけただろうか。

「眠っている間、夢を見ていました。本当の私が、幸せそうに笑っているんです。どうしてそんな夢を見たんだろう。そうなればいいなって思ってるから？　もうすぐそうなることを示唆しているから？　それとも――」

それとも、これから先、そんな風に笑えない自分に、気づいていたから？

夏と出会って、変わりたいと思った。

夏に恋をして、本当の自分を見つけることができた。

夏を好きになって、自分の弱さを知った。

夏を遠くに感じて、夢の終わりを見た。

36 本当の自分（後書き）

少しワル乗りした回でした（笑）

やっぱりエロティシズム（?!）は必要ですよね。

最終的にはまったくエロ入ってませんでした。

作者的に、「失恋Ⅱ髪を切る」が成立しているので、桜にも同じようにしてもらいました。

まあ作者はもっとバツサリいきますが。桜は実際3センチくらい切りました。

桜はなぜ失恋したと思っているのか。勘の良い読者様には分かっているかもしれませんが、

それについてはもう少しあとに書きたいと思います。

とりあえずこの保健室ネタがいつまで続くか分からないので……

37 夏の特別

私が夏を好きだということを、杏堂先生は知っていた。きっかけは私が、本当に大切なものの存在を明らかにしたとき。先生はふつと唇を吊り上げると、「入来だろ？」と言った。

「弥代、入来に告白したことがあるんだろ」

「……どうして、」

「入来は、ここにはよく来る」

部活でも体育の授業でも、つい熱血して張り切ってしまう夏は、あちこちにすり傷をつくって保健室にやって来るのだそうだ。

「実はあいつの兄貴と高校の同級生だったんだ。その関係で入来の家によく遊びにも言ってたから、あいつのことは知ってた」

先生が夏を「入来」と呼ぶのは、夏のお兄さんをそう呼んでいたから、らしい。おかしいと思ったんだ。人気者の夏はほとんどの教師にも、「夏」と呼ばれていたから。

「入来って、付き合い浅いだろ」

「え？」

「友達多くて、いつも囲まれてる。1年にも3年にも、教師にまで慕われて、言うことない学校一の人気者。だけど、知ってるか？」

あいつに親友と呼べる奴はいないんだ」

そう言われてみれば――。

ふと気づく。夏はいつも、みんなと行動を共にしているけれど、“特定の、特別な誰か”と一緒にいるところを、見たことがない。

まだ、私が夏を知ったばかりのころの、初めて学校で再会したのを覚えている。入れ替わり初日、学校生活の窮屈さにうんざりして、開放感を求めて屋上に出た。立ち入り禁止になっているそこで、私は、夏と会ったのだ。夏がひとりでよく来ているという、その場所
で。

空に手が届きそうで好きなんだ、と話す夏の、太陽のほうに手をかざして眩しそうに目をこする仕草を、何度も見た。私はそれが、とても好きだなと、思っていた。

だけどそこに、「別に理由なんてないけど」と言っただけの、理由があった。

「入来って、中学はここよりも少し遠いところに通ってたんだけど」

と杏堂先生は切り出して、話し始めた。

「幼稚園のときからの幼なじみで、入来の無二の親友だった奴が、死んだんだ。生まれつきの病気を持って、入来もそれを知ってた。そいつのために、いつも気を遣ってたよ」

だけどそれは遠慮や同情なんかではなくて、その幼なじみと一緒にいたいと願う夏の、夏自身のためだった。

「でもその幼なじみは、ずっと申し訳ないと思ってた。入来と……あ、あいつの兄貴な、そいつと俺に、幼なじみの奴は言ったんだ。

『夏にはこれ以上心配かけたくない』って。だから、黙っててくれって」

「何を、ですか？」

喉の奥から、何かが迫ってくるような気がした。正体は分からないけれど、妙に嫌な感じのする、何か。

「俺たちにそう話したときでさえ、そいつはすでに、余命1ヶ月を切ってたんだ。そのまま結局、入来には何も言わずに、突然、死んだ」

椿がついた嘘を忘れないと、夏は言った。

あのとき私は、初めて屋上で会ったときに夏が言っていた「信じてた奴に嘘をつかれた」とは、椿のことだと思っていた。

もちろん私も、そのうちのひとりなのだろうけれど。

夏が、あのとき言っていたのは、私ではなくて――。

空に手が届きそうだと言っていた。

眩しそうに空に手をかざしては、目をこすり、何かを思い浮かべていた。

夏。昼休み、私が屋上を走り去った後も、いつものように、空に手をかざしていたのだろうか。

38 夏と椿

「夏は、その人が嘘をついたまま死んでしまったのを許せないんですね」

「許せないっていうよりも、悲しかったんだろ。一番近くにいて何でも言い合える仲だと思ってた奴が、自分にだけ何も言わずに死んだんだから」

そう。だから夏は、友達と深い関係をつくらない。つくろうとしない。いや、きっと、“つくれない”。嘘をつかれたときに、過去を思い出してしまうから。

「あいつにとっちゃ、無意識なんだと思うけど。でもその無意識の中で、分かかって、これ以上仲良くなつてはいけないうちでちゃんとブレーキをかけてる」

他人に深く踏み込まれそうになったとき、夏は、笑いながらそれかわす。相手に気づかれないように、笑顔の裏に気持ちを隠して、逃がっている。

「だけど、弥代。お前だけは、入来の特別だった。お前なら入来を変えられると思ってた」

先生は少しだけ、悲しそうな表情をしていた。

＊ ＊ ＊

「入来、よく弥代の話してたよ。楽しそうにしてるのなんて久しぶりに見たから、俺も入来の兄貴も、けっこう驚いててさ。好きな奴でもできたかって聞くと、照れながら『うるさい』って言った。それだけでバレバレだったけどな」

だけど嬉しかった、そう言って先生は、私の隣に腰を下ろす。べ

ツドは軋んで声を上げ、小さく跳ね上がった。

「それが弥代だって分かってから、俺も、お前のこと、よく見るようになったよ。元々目立ってはいたから、誰かに聞く程でもなかったけど。それで、もしかしたら弥代も入来のこと好きなんじゃないかって勘付いた。お前も入来にだけ、違う顔をしてたから」

「違う顔？」

「何となく、な」

椿が好きな人のことを話す顔を、何度も見た。普段は見たことのない、可愛くて、こっちまで恥ずかしくなってしまうような笑顔。夏のことを好きだったときの椿もまた、同じように笑っていたのだろうか。

「入来が弥代に告白するって決めたのも、俺らがけしかけたから。

『明日告白する』って、決めたのは入来だったけどな」

それが、あの罰ゲームのあった日。椿が夏を、騙した日。

「帰ってきたあいつは、また、前と同じ顔をしてた。幼なじみを失ったときと同じ、悲愴と苦しみを抱えたような顔。それ以来、弥代のことを話さなくなった。あの日、何があったんだ？ お前が入来を振ったのか？」

「そんなこと、してません」

「じゃあどうして、あいつはあんな顔をして帰ってきた？ お前が何か言ったのか？」

そのとき私は、先生にすべてを話そうなんて気はちっともなかった。

だけど、唇が勝手に動いて、言葉をつくって。

「私は何も――。ただ、先生の言うように、そのころ夏が椿を特別に思ってくれていたのなら、椿は夏を、裏切ってしまったことになります」

すべてに繋がる言葉を、私は口にしてしまっていた。

39 さよなら

先生はひとつ黙って、はっ、と声を上げると、額を軽く押した。「おい、待て。言ったことがよく分からない。お前は何もしてない、けど『椿』は裏切った？ 何だそれ、言ってることおかしくないか」先生が混乱するのも当然のことだ。だって先生は「桜」を知らないから、どこからどう見ても、私は「椿」でしかないはずだった。

——こんなつもりじゃ、なかったのに。

こんなこと言う気なんてなかったのに、どうして、言ってしまったんだろう。

でも、嘘はつきたくない。先生は私に夏の過去を教えてください。私を、信じてくれたから。

「おかしくなんて、ないです」

この人になら打ち明けてもいいと、思ったのは、これで2人目。

「先生、あたしは、弥代椿じゃありません。あたしは——」

本当は、こんな風に、私の存在を知ってほしかったのかもしれない。

この人だったら信じられると思える、誰かに。

夏であってほしかった。いや、何時間か前までは、それは夏のはずだった。

だけど、それが夏でないのは、私と夏の運命の結び目が拙くて脆いから、なのだろうか。

* * *

「双子ねえ……。まさか、そうだとは思いつかばなかったな」

「でしうね」

私は先生に、すべてを話した。椿の提案で入れ替わりをしたこと。1日で終わるはずだったそれが、結局2週間も経ってしまったこと。私が、「桜」であることを。

「あたしと椿、見分けられたことなんてないんです。性格は全然違うけど、顔は同じだし、似せようと思えば性格だって真似できる」

「ああ、そうだろうな。現にお前は、弥代椿として完璧にこの学校に馴染んでるし。誰も、お前が別人だなんて思っていない」

「でも、たったひとりだけ……」

「え？」

「……いえ。なんでもありません」

ちょうど6限の終わりのチャイムが鳴った。教室に戻る、とベツドから身を起こした私を、先生は呼び止めた。

「お前はいつまで、ここにいます？」

引き戸を開けた手を止め、足を止め、振り返る。先生はきつと、気づいていた。私の気持ちと、私の決意に。

「今日——。今日で、さよならです。先生」

たったひとりだけ、私に気づいたくれた。

私を見つけてくれて、信じてくれた。

私はそのひとを、裏切るわけにはいかない。

——夏、ごめんね。

嘘をついて。

二度も夏を騙して。

何も言わずに夏の前から消えるから、夏は、嘘をつかれたことなんて知らずに、今まで通り過ごしてほしい。

私がいたことなんて気付かずに。

この先も、知らずに。

40 私たちの失敗

校門を出ようとしたとき、夏を見た。野球部のトレーニング中、こっちには気づいていない。

チャンスだ、と思った。このままさよならを言えずに離れたところで、私の心は夏ばかりをいつまでも追ってしまふような予感がしていたから。ここでちゃんと別れを言っておけば、その気持ちもしは治まるかもしれない、と。

「夏、これでさよならだよ。バイバイ」

夏が気づかないように、ひっそりと。

それでも私の心は穏やかな海のように、波立っていた鼓動も、大きく寄せては返していた気持ちも、平坦で落ち着いた水面をつくり出していた。

これで、前に進めるような気がした。

* * *

家に帰ると椿はいなくて、だけどうやら帰ってきたらしい跡だけ、残っていた。椿が学校から帰ってすぐに飲み干したミネラルウォーターの、空になったペットボトルが、キッチンのカウンターに転がっている。

「椿……?」

部屋のドアをノックしても、椿のいる気配はない。どこかへ行ったのだろうか。玄関には、バランスの悪い揃いのローファーが1足

分、置いてあった。

——家にいるはずだよね。

だけど椿はやっぱりどこにもいなくて、仕方なく、制服を着替えた私はリビングにいた。

「ただいまー！！ あっ、桜。帰ってたの」

「椿！！ どこに行ってたの？ 心配してたんだから」
「へっ？！」

椿が帰ってきたのは、私がソファに座って20分ほど経ったあと。椿はあっけらかんとした表情で私を見た。

「椿、靴はあるのにいないから、どうしたのかと思ったの」

「ええー？！ 気にしすぎだよお」

制服姿の椿は、例の、あの彼を送ってきたのだと言った。さっきまでこの家に、彼が来ていたらしい。

「えっ。……ってことは、付き合うことになったの？」

「それがね——」

そのあと椿が説明してくれたことを、あまり私は理解することができなかった。まずは前置きに、と、告白は結局できなかったのだと教えてくれた。

「好きです、とはね、言えなかったの。ううん、彼が言わせないようにしてたのかも。たぶん、あたしの気持ちには気づいてると思う」
「じゃあ彼は、椿の気持ちには応えられないってこと？」

「うん。でもね、あたしもそれは分かった。彼の態度で、気づいてたの」

この家に来たのは、と切り出すと、偶然帰り道が一緒だったの、と、椿は答えた。無理を言って送ってもらって、そのあと彼を途中で送ってきたのだ、と。

「何で椿も送るのよ」

「彼にも言われた。それじゃ意味ないだろうって。でも、少しでもそ

ばにいたいなって思っ。どうせ、今日でさよならだし……」

「椿……」

「答えが分かってても、告白するべきだったのかな」

椿は溜め息とともに笑顔を吐き出して、力なく笑う。どうしようもないよね、と、自分自身にも言い聞かせているように。

「そんなことないよ、椿。そのあとに何が起こるか分かってるなら、伝えないほうがいい気持ちも、ある」

「え、じゃあ、桜も……？」

「……うん」

夏を傷つけてしまうことは分かっていた。もう側にいられなくなることも、分かっていた。

それでも自分の気持ちを優先して伝えようとするほど、私は子供じゃない。

それでも相手を無視して自分の気持ちを伝えられるほど、大人でもない。

「どうするべきか、分かっていたの。ひっそりときよならだけを告げて、あたしは夏の元から離れるべきだって。好きだからこそ、それしか、できなかった」

「……あたしたちって、どこから失敗してたのかな」

「もしかしたら、この恋自体が、あたしたちの失敗だったのかもね」
そうかも。椿は頷いて、また、笑った。私たちは自分の失敗に、笑うことしかできなかった。

恋をしたこと、間違っ。たなんて思わない。私は夏を好きになって、人生が花開いたように、楽しかったんだ。

だけど私たちは、この恋を、恋した相手を思うあまり、臆病になりすぎた。

それが、私たちの予測していなかった、失敗。

41 本来の日常（前書き）

今回短めです、すいません。

次回は視点が椿になるので、分かりやすく回を分けることにしました。

41 本来の日常

次の日から私たちは日常の学校生活に戻るようになったのだが――。どうしてか、初めは制服を着替えるのもどこかきこちなくて、私はネクタイを、椿はリボンを、当たり前のように取り上げた。

「あっ、桜。あたしたち、違うよ」

「え?!」

椿に言われて、はっとする。私はちょうどネクタイを結んでいたところで、きゅっと締めてしまえば、“いつもの私”の完成だと思っていた。

「あ、そっか。あたしはリボンなんだ」

無言で椿と交換して、それをつけ直す。それが私たちの本来の制服。それなのにこの違和感は、どこからきているのだろうか。

「椿。あたし、そろそろ行くね」

「え? あ、そうだったね。桜が先なんだ」

「そうよ。椿ったら、ボケないで」

「ひっど〜い!! ボケてなんかないもん。あたしはまだ……」

“まだ、日常に慣れていない”

私も椿も、入れ替わったことで、あまりに多くの習慣をつくり過ぎてしまった。これからは、本来の日常に慣れていかなければならないなんて。そんなことになるなんて、思いもしなかった。

「椿。じゃあ、あたし行くから」

「あ、うん」

言わなくても分かっていた。

私たちはきつと、お互い、同じことを思っている。

――椿。お互い、頑張ろうね。

私たちはきつと、お互い、心の中で健闘を祈っていた。
これからずっと続いていく、好きな人のいない学校生活を、いつか、当たり前だと思えるように。

42 第三者（樁視点1）（前書き）

タイトル通り、樁視点の物語です。今まで桜だったので混乱させてしまったらすみません。

ラストに向けて、樁視点はもう少し続きます。

明日の更新は深夜になります。1時頃にはアップできると思うのでよろしく願います。

42 第三者（樁視点1）

「ちょっと夏！！ 何なの？」

教室のみんなが見ている前で、私の腕を掴んだ夏は、どこかへ向かって走り出した。

一週間が経って、日常がようやく馴染んできたころの、ある昼休み。ごはんを食べ終わって、久しぶりに屋上の爽やかな空気に触れなくなった。屋上には、桜と入れ替わりをする前、ごくたまに来ていた。無性にひとりになりたくなったとき、周囲の喧騒がひどく耳障りに聞こえて、そこにいるのが耐えられなくなったときに。

今日は、毎日のように思いついてしまう彼のことを吹っ切りたくて。たとえそれができなくても、ひとりで、彼のことを考えたくて、屋上に行こうと思った。

「ごめん。あたし、ちょっと……」

そう言って友達の輪から抜けようとしたときだった。夏が私の前に立って、私の目をじっと見て、ぐいっと、腕を掴む。そしてそのまま私を連れて、教室を飛び出していったのだ。

「ちょっと夏！！ 何なの？ どこに行くの」

掴まれた腕が、夏の体温で熱を帯びていく。そういえば私は、夏のことが好きだった。もし去年の今頃こんな風に連れ出されていたら、私の心から湧き出る熱が腕に伝って、夏にまで届いていただろう、と、そんなことを考えていた。

* * *

バン、と、思い切りドアを開くと、胸元のターコイズと同じ色の

空が見えた。

「屋上……？」

ちようどここには来るつもりだった。ただ、それはあくまで、ひとりになりたかったから。今は隣に夏がいて、その夏の意味で、私はここに連れて来られている。

「夏も、知ってたの？ 屋上に入れること」

ここは過去に飛び降り騒動があつて以来、立ち入り禁止になっている。だけど鍵はかかっていなくて、特別、見回りをしているわけでもない。それを知っていれば、誰でもここに入ることはできるのだが――。今まで誰一人として、私以外の誰かがここにいるところを見たことはなかった。もちろん夏なんて、いつも友達に囲まれているから、ここに来ることがあるわけ、ないと、思っていたのに。

「……俺は、ここにはよく来てる」

「あ、そうなんだ。あたしもたまに来てたよ。でも会わなかったよねえ」

そう答えた私に、夏は、言った。

「会ってただろ。よく」

「え？」

「お前、記憶でも失くしたのか。ずっと会ってただろ。先週も、その前も……ずっと、ここで会って、話してたろ」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。私が記憶を失くした、というより、夏がおかしくなったんだ。そう思って口を開きかけたときに、ふと、気づいた。

“先週もその前もずっと”

それは、私じゃない。桜だ。

「あ、」

そういえば桜は、ひとりになれるお気に入りの場所ができたとは教えてくれたけれど、そこがどこなのか、絶対に教えてくれなかった。「秘密の場所なの」と曖昧に笑って、そのあとは、一切何も。もしかしてそれが、屋上のことだったのだろうか。しかも、ひとり

じゃなくて、「ふたりきりになれる場所」だったということ。

「夏、それはね、」

「椿、先週ここを飛び出していつて以来、屋上に来なくなったし。もしかして俺のこと避けてるのかって思ったけど、教室じゃ普通に話すし。もう、訳分かんねえよ。それに……」

「それに？」

そのとき私は、ひどく冷静に、夏の言葉を聞き入れることができていた。

「まさかあたしが別人に見える、なんて、言わないよね？」

「何で——！！」

自分のことになると周りが見えなくなるが人のことはよく見える、とは、このことを言うのだろう。

このターコイズ透き通った空のように。桜の気持ちも夏の気持ちも、第三者の私には、すべて見えていた。

43 家路を急ぐ（樁視点2）（前書き）

後半に書くつもりの中かつたものを入れてしまいました……。詳細はあとがきにて。

43 家路を急ぐ（椿視点2）

私が別人に見えるか、と聞くと、夏は言葉を失った。きっとそれは、私がいかに突拍子もないことを口にしたからではなくて、夏が考えていたことをずばりと当てた私への、驚きだったのだと思う。「あたしが椿じゃないって、思ってるの？」

「いや、お前は、椿だけど……」

「じゃあ誰が別人なのよ」

夏は少し躊躇って、ぐっと口を噤んだ。やはり別人がいるなんて、そんなことはあり得ないと思い直しているのか。それとも、別人に見えたときの私を思い返しているのか。

やがて沈黙を破ったのは、夏が、私を別人だと思ったときのことを思い返したあとだった。

「屋上で会ってたのは、みんな、椿じゃないような気がする。あとクラスマッチのときも、その、もっと前にも。……いや、椿なんだ。椿にしか見えないはずなんだけど。でも、何か違うんだよ」

夏は頭を掻きむしって、頭の中でぐるぐる巡っている考えを追い払おうとしていた。もしここで私が「そんなことあるわけないでしょ」なんて言葉をさらっと口にしたら、夏は、それを信じていたと思う。

だけど私は、さらに夏を誤魔化そうとする、そういう気持ちを捨ててしまっていて、分からないなりに真剣に伝えてくれた夏に、ちゃんとぶつかるべきかもしれないと、悟った。

「もし、次に夏の前に現れるのが、夏の思う“別人”だったなら――。そのときは、夏が見抜いてあげてくれる？」

「え？」

「来週の月曜日、この学校に私じゃない“別人”が来て、それに夏が気づいたら、全部話すから。だから、週末の2日間だけ、時間をくれない？」

「……!! それって、」

どういうことだ、と言いかけた夏の言葉は私のひとことによつて
かき消され、そのまま喉の奥へ、沈んでいった。

「あたしが絶対連れてくるから。だから夏、お願いだから、分かってね」

夏の過去を知らない私は、夏が嘘つきは嫌いだということも知らなくて。

もう一度2人が会って今までのことをすべて話せば、桜と夏の2人はこれで幸せになれるだろうと、単純に、そう、思っていた。

* * *

早く帰って桜に今日のことを伝えなければ。家路を急いでいたら、駅でばったり、彼と再会してしまった。もう二度と会わないと、もう忘れようと決めたはずの、彼。そういえば家が近いことをすっかり忘れてしまっていて、思わぬ巡り合わせに、1拍遅れて鼓動が疼く。叫ぶように強く、倒れてしまいそうなほど速く、脈打って、胸が高鳴りを知らせる。

「椿さん」

と、彼が、私の名を呼ぶ。「桜」を名乗っていた私に、「椿」と。
「……どうして、」

「桜さんに聞きました。でも僕、分かってましたから。あなたが桜さんではないことくらい、初めから知ってました」

「うそ。そんなこと、あるわけ、」

「嘘なんかじゃないです」

私を包む、ふわりと感じるバラの香り。高等部と中等部を結ぶフェンスの下にひっそりと身を隠し、バラの香水をいつも纏っている

彼の香りと、同じもの。その香りが、私を包み込む。初めての感覚に、微かにも身動きが取れない。

「な、に？ からかってるの？」

「椿さんさ、気にしてるの？ 僕がまだ中学生だってこと」

「え？」

「だから、僕の前から逃げ出したの？」

「ちが、そんなんじゃ、」

彼の腕に力が一層こもって、身動きどころか、息さえ、できない。

「痛いから、離して」

そう言うと、彼はすなりと、私を彼の中から放り出した。

「来週は来てよね。椿さん、僕はまだ、あなたに何も伝えてないんだから」

去っていく後ろ姿は、大人ぽく見えても、中学生のもの。

だけどこの彼に、私は心惑わされている。

——そっちから、逃げ出したくせに。

「帰らなきゃ」

数分で起こった、数分で終わった、再会。彼は桜に、何を聞いたのだろうか。

早く帰って、桜に、今日あったことを伝えなければ。

そして、今日あったことを、すべて、聞かなければ。

43 家路を急ぐ（樁視点2）（後書き）

樁の恋はもとから彼の設定も決まっていたんですが、この中で書くつもりは全くありませんでした。次回作として発表しようかと考えていたものです。結局次回作にはしないつもりですが……。

ここで登場してしまった樁の恋の相手は、物語の展開に大事なところだったので、今回限り、出しました。

44 私の分身（椿視点3）（前書き）

椿視点はこれで終わります。次からはまた桜視点に戻ります。

44 私の分身（椿視点3）

家に着いて早々、神妙な面持ちでテレビに向かっていた桜が私を見るなり、こんなことを言った。

「椿。来週の月曜日、あたしの学校に行きなよ」

「桜、どうしたの。もう二度と入れ替わりはしないって、2人で決めたじゃない」

「そう。だけど椿は行くべきだよ。行って、彼ともう一度話してきて」

「え？」

帰って桜に聞かなければならないと思っていたことを、桜のほうから話してくれた。

＊ ＊ ＊

昼休みのことだった。

桜はよく、中等部と高等部のフェンスのそばにある樹齢100年と言われる木によじ登っていた。そこに吹く風はとても柔らかくて、気持ちが良いくて。ひとりになりたいときに来ていたそこに、今日は、随分久しぶりに訪れていたのだった。

「もしかしてそこにいるの、桜さん？」

声のするほうに視線を落とすと、フェンスの向こう側に誰かが立っているのが見えて、トン、と、飛び降りる。その高さからのスマートな着地に、彼は少し驚いたような目で振り返った。

「桜さんて、わんぱくな人なんですね。イメージ通りでいいよ」

この人は椿を知っている。直感で、桜はそう思った。

「なんか失礼じゃない？ その言い方」

「まさか」

「……そんなところで、何してるの？」

探りさぐりに言葉を選んで、言ったつもりだった。

けれどその彼は、中学生であるはずの彼は、桜のぎこちなさに気づいてしまった。

「ああ、今日は本物なんですネ」

「え？」

「いつもここで僕と会っていたあの人は、もう、来ないんですか？」
その彼の確かな瞳に、桜は、嘘をつくことなんてできなかった、
と、言った。

* * *

「ごまかせなかったの。彼の瞳は、あたしを通して椿に聞いていた
ような気がして。それならあたしは、椿と彼を繋げなきゃいけない
と、思った」

「そう」

「ごめんね。2人でこの恋を終わらせようって、決めたはずなのに」

「ううん、いいの。あたしだって、同じだから」

「え？」

私は伝えなければならない。桜に、言わなければいけないことがある。

「桜。来週の月曜日、あたしたちはこの恋と、向かい合おう」

* * *

忘れるはずだった。

彼を想う心がまだこんなにもキラキラと輝いているのを分かっている、彼を信じきれない気持ちだって確かにそこには、生まれていたから。

掴み処のない微笑み。曖昧な返事。中学生と思えない落ち着き。彼を成すものすべてが私の周りをふわふわと漂って、捕らえることなんてできないんだと、いつも、言い聞かせていた。

だから私は、彼から、逃げた。彼が、あまりに容易く、私の前から立ち去ることができるのが悔しくて、哀しくて。ついに、私から逃げ出してしまった。

「僕はまだ、あなたに何も伝えてないんだから」

その彼の言葉でさえ、私は信じきれていない。彼の、妙に大人の世界観を持った部分が、私の反応をからかっているんじゃないかと、疑ってしまう。

だけど、桜が行くなら――。同じ想いを共有して、誰よりも分かり合える、私の分身が、夏に会うと、決めたなら。

「桜が、夏と向かい合うなら、あたしも彼を信じる」

彼が私に伝えたいと言ったことすべて、信じて受け止める。

45 双子としての幕開け

その日の夜。ベッドに入って明日のことを考えていた。

私はどうすればいいのだろうか。夏は私に、気づくだろうか。

そして、すべてを話したら、夏は私を許してはくれないのだろうか、と。

「桜っ、おはよ」

窓辺のカーテンを開けられて、朝陽が眩しく私を照らした。

「椿……なに……」

「なについて、もう朝だよ。お母さんももう仕事行ったから、早く支度して。一緒に出るよ」

「え？」

入れ替わった場合、私は椿よりも10分、遅れて出るのだが。

「駅まで、一緒に行こうよ。いいじゃない。あたしたちは双子なんだから」

そう、椿は言った。

* * *

「じゃあ椿。ここで一旦お別れだね」

「うん」

「椿。彼はきつと、椿のことを想ってるよ」

「ありがと」

心なしか、椿には緊張の表情が見える。聞けば昨日、椿は彼に会ったのだという。駅で偶然……。だけどそれは、偶然ではないと思う。彼は、椿を待っていた。私ではない、もうひとりの桜を。

「じゃあ、あたしも行くね」

「桜」

「ん？」

不意に、椿が私を呼び止める。

「どうしたの、椿」

「桜。桜はたぶん、肝心なところを何も教えてくれてないから、あたしもはっきり言えないけどさ、」

椿は私の肩に手を乗せて、にこっと笑った。

「夏は、桜のことが好きなんだ。自分でも気づいてるか分からないけど、桜のことが好きなんだよ。だから桜は、何も気にしないで、言いたいことを言えればいいんだよ。そうすればちゃんと伝わるから」

「椿」

じゃあね、と言って改札を抜けていった椿。向こうから来る人々が、椿を通り過ぎ、また同じ顔の私を見て驚き、「わゝ双子だ」など言っているのが聞こえてきた。

ついに知られてしまった。今まで隠してきた、私たちの双子の関係を。これからはもう、双子として生活していかなければならない。

「椿。これが、あたしたち双子の、双子としての、幕開けだね」

椿の後ろ姿が完全に消えてから、私も改札を抜けた。明日からは2人でここを通る姿を、頭の中で思い描きながら、実はこの町に引っ越してきてからの1年、そんな生活にずっと憧れていたことに気づく。

もう双子を隠す必要もない。私たちが同じじゃないことを分かってくれた人が、私たちの前に、それぞれ現れたから。それだけで、充分。

ただ、その人がこれからも私たちの隣にいてくれたら、それはとても、幸せなことなのだろうけど。

46 理由

校門をくぐるのにこんなにも緊張したのは、初めて入れ替わりをしたあの日以来ではないだろうか。

いや正確には、あのときは椿が私にネクタイを取りに行かせたせいで、学校に遅刻してしまうことだけを考えてこの道を走っていたから、この緊張感は今が初めて。

何だか不思議なものだ。入れ替わりをして1か月以上経つというのに、今さら、初めての緊張を味わっているなんて。

「おはよう椿。今日はちょっと早いね」

「おはよう乃李。1本早い電車に乗れたんだ」

ちらりと教室を見回すと、夏がまだ来ていないのが分かった。野球部の朝練が長引いているのだろうか。いつもは私が来る前には、夏はすでに教室に戻っていた。

——まだ来てないんだ。

とりあえず束の間の安心。そのすぐ側で、私に向けて声が飛んだ。
「椿。夏ならまだいないよ」

遠くのほうにあった意識がふっと戻されて、私は驚いた顔で乃李を見る。にこっと、私を見上げて笑った乃李は、続けて言った。

「2人の間に何があるのか、あたしは知らないけど。でもあたしは、椿のことは分かってるつもり」

「乃李……」

そういえば、入れ替わりをする前のクラス写真で、椿が夏のあとに真っ先に指差したのが、乃李だった。「1年の頃からずっと一緒にいるんだけど、あたしのことがすごい好きな女の子なの」と椿は言って、「結構ベタベタなんだ。たまにうっとおしいの」と、溜め息を吐き出した。

「ふうん、何か面倒そうだね」

「いい子なんだけどさ、あたしにばかりくっついてるの。でもやっぱりそうやって側にいてくれるのは嬉しいことなんだけどね」

その話を聞いて、乃李は私の苦手なタイプの女の子だろうと思っていた。初めて会ったときからずっと苦手意識を持っていたから、乃李はいつもの椿と違う私の態度に、気づいていたかもしれない。

だから乃李は、こんなことを言ったんだ。

「椿がもう夏に恋愛感情を抱いてないのも、椿と同じ顔のあなたが夏を好きなのも、あたしは、みーんな分かってるよ」

椿のことが好きだから2人の恋を応援してるね、と、乃李は私の手を握り締めた。

* * *

すぐにチャイムが鳴ったのに、夏はまだ来なかった。私の後ろの席はぼつんとそこにあって、存在感がまるでない。いつもならドキドキするはずのこのホームルームの時間も、あらゆる感情が沈んでしまっているようで、どんより曇りがち。ふっと窓に目を向けると、ポツポツ雨で濡れていくのが見えた。

——これじゃ屋上に行けないじゃない。

今日は夏と、屋上で話さなければならぬのに。せっかく覚悟を決めたはずの心が、窓の外で流れていく雨のように、ザアアっと音を立てて引いていく。

——早く来てよ。夏。

夏も来ない。屋上にも行けない。それならば、私はどうしてここに
いるのだろうか。

「ホームルーム始めるぞ」

まもなく越丘先生が入ってきて、出席簿を開いた。すると、1番
の「入来夏」の名前を呼ぶ前に、先生は思い出したように言った。

「あゝ。夏は今日欠席だ」

周囲がざわめき立って、乃李が私のほうを振り向く。どうやら夏
は、今まで一度も欠席したことがなかったらしい。あの夏がどうし
た、という心配の聲が、教室を飛び交っていた。

「朝早くに連絡があったんだ。具合が悪いから欠席させてくれて
本当は親からの連絡じゃなきゃだめなんだが、あいつはサボるよう
な奴じゃないしな。声もつらそうだったし、俺が特別に許可した」
と、先生は言った。

ただ、私はそこでひとり、夏の欠席の理由を知っていた。

——逃げた。

夏は、真実から目を逸らした。

私から、逃げたんだ。

47 夏の空

空が果てしなく広がっているのは、空の上の人たちが見守ってくれているからだと思う。

だからこの雨上がりの空は、きっと、夏の大切な人がつくってくれたものなんだ。

私と同じ、夏に嘘をついた、あの人が。

「あゝあ。せっかく晴れたのにな」

6限が始まったばかりだった。保健室に行く、と言って先生の目をすり抜け、保健医の杏堂先生には正直に、「夏を待っている」と話した。何かを言いかけた杏堂先生の口からは、「分かった」とひとことだけ返ってきた。それが先生の言いかけた言葉ではないことくらい分かっていたが、私の欲しいひとことが返ってきたので、とりあえずそれ以上は追及せずに保健室を出た。

そして私は、屋上に来た。夏が来るはずなのに、ここにいたら、夏が来てくれるような気がして。

「なんて、思ってはみたけど」

そこにいるのは私ひとり。夏の姿なんてもちろんなくて。

今日はもうだめかもしれない。そう思った、ときだった。

「お前……？」

やっぱり夏は、来てくれた。

* * *

「どうしたんだよ、お前」

「それはこっちのセリフなんだけどな」

「今6限だろ。サボりかよ」

「だから、そっちに言われたくないって」

お互いの胸のうちを探るように、私たちは話し始めた。2人の間に流れるこの奇妙な雰囲気は、きっと夏のせいだ。

夏はもう、私が誰だか分かっている。だから、私のことを「椿」と呼ばない。

「何で今さら、学校に来たの。逃げたんじゃなかったの」

「そんなんじゃないよ。今日は、用事があったんだ」

「用事？ 何？」

口ごもって言葉を詰まらせた夏は、私の真剣な目を見てぐっと体を引くと、呟くように小さな声で、言った。

「今日は……友達、命日なんだ……」

「命日……」

「ああ」

「それ、って、夏に嘘をついた友達……？」

何で、と驚いて言った夏に、杏堂先生から聞いた、と答えた。夏は「ああ」と呟いて、空を見上げた。

「空に手が届きそうって、そのことだったんだね」

「別に、夢見てるわけじゃないんだ。まさか友達に会えるなんて思ってるわけでもないし。ただ知りたいのは、何で俺にだけ、嘘をついてたんだろうって。答えなんて返ってこないのは分かってるけど、でも、ここにいと癒されるっていうか――。そんな気分になれるから、どうしても、やめられないんだ」

「ううん。きっと、ここで夏はその人と会ってる。夏が気づいてないだけで、その人は、ここにいるんだよ」

だって空は今日も、こんなにも青く澄んで。

何度も見てきたターコイズの空色も、夏と一緒に見てきたものだ

ったから。

「あたしと夏がここで会えたのも、その人が見守ってくれているからだよ」

この空は夏のために。

空の上から夏を見るために、つくられたものなんだろう。

48 繋がる言葉

「どうして夏にだけ嘘をついていたか、って、言ったよね」

「ああ」

「どうしてだと思う？」

「……分からない。でも、悲しんでほしくなかったからなのかな」

夏はそう言って、柵に背中をかけた。無意識なのか、視線が空へと映っていくのを見た。

「……あたしは、違うと思うな」

「え？」

夏の瞳が、空の彼から、私に流れてくる。

「夏のこと、好きだからだよ。自分の前で夏に悲しい顔をしてほしくなかったから、言えなかったんだよ。本当のことを」

「……何で、お前にそれが分かるんだよ」

私はきつと、夏の、その言葉を待っていた。

夏もきつと、私が返す言葉を、待っていたのだと思う。

「だって、あたしも同じだから。夏の悲しむ顔は見たくなかったし、嘘をついてるなんて……そんなこと、言えなかった」

私も同じだから、分かるの。

その人と同じで、夏のことが、好きだから。

＊ ＊ ＊

夏は私の言葉を理解した。その言葉に込められた意味と、私の気

持ちに、気づいた。

「どうなってるんだ。お前は、誰なんだよ？」

隣に腰を降ろした私を避けて、夏は、はっと退いた。そしてそれは、2人の間に微妙な距離感を生んだ。近づいたら触れられるのに、触れようとしたら、逃げられる。

「それは、もう、分かってるんでしょ？ あたしが椿じゃないって、

夏は初めから気づいてたじゃない」

「だったら何で――。言わなかったんだよ」

「言えるわけじゃない」

今さら、椿の遊び心で入れ替わりをした、だなんて、言うつもりはない。だってそのあとの入れ替わりには、私の意志もあったから。「誰にも内緒って、椿と決めたの。しらばっくれるんだって、決めていたの。だから、そうするしかなかったのよ」

「そんな理由で、俺とか、クラスみんなを騙してたのかよ」

「そうよ。みんなを騙して、あたしが椿の振りをしてたの」

「そんなんで、お前は楽しかったのか？」

クラスみんなを騙して、「椿」と呼んでくれる人たちに「あたしは椿じゃない」と心の中で何度も罪悪感に苛まれて、それでも――。

「楽しかった。今まで生きてきて、初めて、学校生活の楽しさを知った。初めて、友達ってかけがえのない存在なんだって、思った。

椿と入れ替わってこの学校に来て、あたしは、楽しかったよ」

「お前……」

でも本当に楽しかったのは、夏と過ごした時間。この屋上で、夏と2人で話した時間が、私は、一番楽しかった。

それを取り戻すことなんて、もう、叶わないけれど。

「俺は、認めない。大切な友達に嘘をついて手に入れた楽しさなんて、絶対に、許さない」

「うん。分かってるよ」

俯いた夏を尻目に、私は立ち上がった。まるで、夏からそう言わ

れることを分かっていたみたい、夏の拒絶をすんなりと受け入れた自分がいた。

「夏は、そう言うと思ってた。どんな理由があったって、嘘をつくのはいけないこと。あたしだって、きっと、許さないと思う。だから、しょうがないよね」

夏の視線は今どこにあるのか、背を向けた私からは、見えなかった。俯いた地にあるのか、空にあるのか、それとも、私に向いているのか。

「でもさ、あたしの、夏への気持ちに、嘘はないんだよ。心は、嘘で繕うことなんてできなかったんだ」

これ以上夏は何も言わないような気がしたから、私は、どうしても言っておきたかった言葉だけ、朝からこの胸の奥で何度も練習して呟いていた言葉だけ、伝えた。

「夏。あたしの名前は、弥代桜だよ。よろしくね」

胸の奥で何度も唱えているうちに、気づいた。「よろしく」は、「さよなら」と、繋がっているのだと。

「さよなら、夏」

振り向いたとき夏は、私を見上げて遠くに空を映していた。

49 終わった恋の小さな希望

家に帰ったら帰ったで、今度は椿が私を攻め立てた。

「何で?! どうして夏に『さよなら』なんて言ったのよ!!」

「どうして、って、別に。だって、そう言わなきゃ終わらなかったじゃない」

「終わらせる必要なんてないよ。そこから始まるんじゃない」

「始まらないよ、何も」

だって、分かっていたの。「よろしくね」と始まりの言葉を口にしたところで、夏は、私が差し出した手を握ってはくれない。私を、許してなんてくれないのだと。

「はつきりと拒絶される前に、あたしが終わらせたの。……恐かったのよ。それ以上夏に、嫌われてしまうことが」

「桜……」

「認めない」と、夏は言った。それは、“桜”の存在を認めないということ。たぶんあのとき、夏の心に残っていた一緒に過ごした時間さえも、消されてしまった。

だからもう、私が失うものは何もない。

だけど、まだ、希望だけは捨てられない。

「夏が、たとえ私と過ごした時間を消し去っても、最後の言葉は夏の心に残ったままだと思うの。人って、出会いと別れの言葉を結構覚えてるものでしょ。だから、夏の中にあたしの名前が生き続けているんなら、それだけでいいかなって」

「何がいいのよ。それじゃ桜の気持ちはどうなるの。夏だって本当は——」

「いいんだって。あたしが、それでいいと思ったの。椿と入れ替わりをしたこと、嘘をついたこと、夏にさよならをしたこと。あたし

は、後悔してない」

「桜あ……」

「椿が泣かないでよ」

「だって、桜が泣かないから、」

そう言っただけで私の胸に額をついて、椿は泣いた。自分は彼と上手くいったというのに、椿の涙は嬉し涙ではなくて、心の底から滲み出た悲しみの涙だった。私が今、泣くことができていたら、きっと、こんな涙を流すのだろう。

だけど、泣けなかった。涙が椿にすべて奪われてしまったように、心の貯水タンクは空っぽになっていた。

——後悔してないから、なのかな。

だけど、できることなら、椿と入れ替わりをしたことも、嘘をついたことも、夏にさよならをしたことも、みんな、なかったことにしたかった。

そんなことできやしないと分かっていたから、後悔という形で気持ちは残らなかったけれど。

だけど、できることならば——。

＊ ＊ ＊

朝、起きると、椿はもういなかった。母は「学校に行った」と言っただけで自分も出て行き、私は、ひとりきりになった。

「椿、どうしたんだろう」

クローゼットを開くと、ちゃんと私の制服はそこに掛かってあった。ということは、彼に会うために私の学校に行ったのでもないら

しい。椿の部屋のクローゼットには、制服は、なかった。

「日直、か、朝練の助っ人……？」

一言声を掛けてくれても良かったのに。もしかして、気を遣ってくれたのかもしれない。私が、眠れずに一夜を明かしたことに、気づいていたのかもしれない。

「あたしも支度しなきゃ」

体がだるく感じられるのは、ベッドに横になった状態でも尚、体を休めることができなかったせいだろうか。ベッドに入ったのが午前1時ごろで、6時間は眠れたはずだった。それなのに、その長い時間すべて、私は夏のことを考えていた。人は考え出すと時間の経過を早く感じてしまうものなのか、想うことは、ちっとも消化しきれなかった。6時間では、まだ全然足りないくらい。

「もう終わったことなのに」

それなのに、何を延々と想ってしまうのだろう。

「そろそろ行かなきゃ」

制服を着て、いつもと同じ時間に家を出る。

私と椿は双子で、だけど、漫画にありがちなテレパシーなんて使えるわけもないから。

そのころ椿が、夏と会っていたなんて、まさか、知るはずもなかった。

50 助っ人（前書き）

途中から椿視点になります。

50 助っ人

その日、椿と夏が屋上で会ったことを、私はあとから知ることになる。

「修羅場だった」

そう笑いながら話すのを、私は、笑いながら聞いていた。

＊ ＊ ＊（椿視点←）

目覚ましを反射的に止め、隣の部屋できっと眠れずに夜を明かした桜に音が漏れてしまわないよう、そろりそろりと支度をする。窓から注ぎ込んでくる眩しい陽射しは、今ごろ桜の目をぼんやりとさせてくれているだろうから、そのうちに下に降りて、母にだけ、「学校に行くから、桜に言っておいて」と告げ、家を出た。今から行けば、ちょうど野球部の朝練が始まる前に、学校に着ける。その間少しだけ、夏と、話がしたかった。どうして桜を許してはくれなかったのか、聞きたかった。

——「分かってね」って、お願いしたはずなのに。

入れ替わりをしたこと、それが結果的にみんなを、夏を、騙すことになってしまったこと。桜のことを、夏には分かってほしい、と、椿は言った。だけど夏は、桜を認めなかった。だから桜は、夏を諦めてしまった。

——そんなの、おかしい。

お互い好きなのに。桜だって夏だって、自分の気持ちに気づいて
いるのに。なのに何で、触れ合った2人の気持ちは逸れてしまっ
たのだろう。

「夏のこと、とっちめてやるんだから」
そうして椿は、学校へと急いでいた。

* * *

「何で夏がここにいるの?!」

「それは、こっちのセリフだよ」

まだ誰も踏み込んでいない校舎に、椿は一番乗りで足をつけた。
着いてすぐグラウンドに向かったが、朝練の準備をしていた野球部
の中に夏の姿はなく、仕方ないので屋上で時間を潰していることに
したのだ。

そこで椿は、柵にもたれて座る夏を、見つけた。

「野球部の朝練は?!」

「……今日はパス」

「何してたの」

「……別に、何も」

椿は驚きのあまり饒舌になり、さまざまに問う。すべてに一拍、
遅れて返す夏は、“椿”が“椿”か、を探っているのだろうか。椿
は、先回りして答えた。

「言っとくけどあたしは、本物の椿だからね」

「別に、聞いてないだろ。『本物』だけ強調すんなよ」

「だって、知りたいかと思ったから」

「別にとって、言っただけじゃん」

どうして桜を認めなかったのか、憤る椿と、嘘をつかれたことが
許せない、夏。2人はそれぞれ、お互いに対して不信を持っていた

から、このままでは言い合いは治まらない。椿はそれに気づくと、くつと口を噤んで、言い直した。

「……桜ならもう、ここには来ないよ」

「え？」

「『二度と夏の前には現れない』ってさ」

椿がそう言うのと、夏は、何も返さなかった。ほら、やっぱり。2人の気持ちはまだ、繋がっている。

「『嘘ついててごめんなさい』って、桜から。あたしからも、ごめん。双子ってことを利用して、みんなを騙してて」

『ごめんなさい』

桜はこの言葉を、夏に言えなかった、と話した。一番伝えなければいけない言葉だったのに、どうしても、言えなかったのだ、と。

「本当はさ、桜は、やめたがってたんだ。ううん、元々入れ替わりには反対してた」

「え？」

「でもあたしが、向こうの学校に好きな人ができて、その人に会いたいって言ったから、桜は入れ替わりを続けること、OKしてくれたの」

それでも夏は黙ったまま、だけど、しっかりと椿の目を見て、話を聞いていた。

「いつからだったかな。桜が、『学校が楽しい』って、あたしに笑って話したの。桜ってひとりで行動することが多くて、学校でも近寄り難いってイメージついててさ。それなのに、あたしの学校が楽しいって、言ったの。あれってきつと、夏のことだったんだと思う」

「え……」
「夏に会えるから、夏の側にいれるから、学校が楽しかったんじゃないかな」

夏が立ち上がりそうとするのが分かった。目線が同じになると、椿

は、改めて、言った。

「桜はね、夏には絶対にばらさないって、言ってたの。『桜としてじゃ夏のそばにはいられなくなるから』って、嘘をついたまま、それでも夏の側にいたいって、言ったの。あたしが夏に言ったのは、嘘をついたことを分かってほしいってことじゃなくて――。そうやって嘘をつき続けた桜の気持ちを分かってほしいって、意味だったんだけどな」

そのあと飛び出していった夏の、向かった先はきつと、桜のころ。

椿がそれからの話を、あとから聞くことになる。

51 夏の気持ち（前書き）

今日で完結のはずだったんですが、思いのほか長くなり、読みづらかったので分けることにしました。何度も引っ張って申し訳ありませんが、次回で完結になります。

51 夏の気持ち

考え事をして歩いていたら、思いのほか早足になっていた。駅に着くと、いつも乗る電車まで、まだ10分もあった。

「あ、定期忘れてきちゃった」

鞆のポケットを探りながら、通行人の邪魔にならないように、端の方へずれる。そういえば昨日は椿の学校に行ったから、定期も一度鞆から出したのだった。

それをしまい忘れたのは、考え事をしていたせい。昨日の夜からずっと、私の心は揺れて、回って、混乱している。これから、どうすればいいのか、と。

後悔なんてしていない、と言ったのは本当の気持ち。夏とは別れてしまったけれど、そんなこと、夏を好きだと気づいて、夏が嘘は嫌いだと知ったときから、分かっていた。それでも想いは消せなかったから、こうなっただけのこと。私はそれを、後悔なんてしていない。

だけど、今になって改めて気づいた。私はこんなにも夏のことが好きだったのかと。生半可な気持ちで夏を好きになったのではない、とは、思っていた。けれど、二度と会えなくなってしまった今でも、私は、夏を諦めることなんてできない。心の中から夏が消えていくこともない。好きな気持ちはずっと、変わっていないのだ。

どうすることもできないのに。

もう、この気持ちを持ち続けていても、届きはしないのに。

それなのに、どうしてまだ、こんなにも夏のことが好きなんだろう。

「あっ、と、切符買わなきゃ……」

ふっと、意識が喧騒の中に戻った。朝のこの時間、立ち止まって

いるのは私ひとりだけ。それが妙に浮いて見えて、はっとして券売機に並ぶ。といっても券売機は長蛇の列をつくっているわけではなくて、むしろ空いている。ほどなくして私が券売機の前に立つところには、左右に切符を買う人の姿はなくなっていた。

そのとき、私は確かに一瞬、不思議に思ったんだ。左右の券売機に人はいないのに、なぜ、私の後ろには人が並んでいる気配がするのだろうか、と。

「あれ、椿じゃん」

夏は、初めて出会ったあのときと同じ場所で、同じセリフで、私の後ろに立っていた。

ただひとつ、あのとときと違って、息を切らして。

* * *

「夏。どうしてここに、いるの？」

もう二度と会えないと、ちょうど言い聞かせていた夏と、思わぬ再会をしてしまったことに、私は正直驚いていた。

「夏。どうして、私の前に現れたの。お前なんか認めないって、そう言うっておいて。何で、私を見つけたの」

いっそのこと、私に気づかずに素通りしてくれればよかった。私の存在を認めなければ、よかったのに。

「そしたらあたしだって――！！」

そうすれば、私はやっと、夏を諦める決意ができたかもしれないのに。

夏はそこに立って、夢中で私が攻めるのを、じっと聞いていた。私がそこまで言い終えて一息つくくと、頃合いを見計らったように、

夏は私の腕をぐいと引いて、券売機から離れた。私たちの後ろにはちらほらと、人が並び始めていたのだ。

人があまり気に留めない駅の端のところに、夏は私を引っ張って、言った。

「『お前なんか認めない』って、俺は確かに言ったけど。だけど、仕方ないだろ。お前のことばっかり考えちゃうんだよ。お前のことが、頭の中から離れないんだよ」

そう、夏はひとつ言っただけ。

「素通りすればよかったなんて言われても、無理なんだよ。お前を探してここに来たんだから、見つけられて当然なんだ」

と、もうひとつ、加えた。

そして、ぼかんとして状況をあまり飲み込めない様子の私に、夏は照れた顔をして「俺はお前に会いたくてここまで来たんだよ」と、言った。

52 桜咲く夏（前書き）

完結です。ご意見ご感想お待ちしております。

52 桜咲く夏

「お前に会いたかったから来た」

それはきつと、今の夏ができる、精一杯の告白。

私にはその言葉だけで、十分、伝わっていた。

＊ ＊ ＊

電車がまもなくホームに到着する、というアナウンスが流れていた。それは私が乗るはずの、乗らなければならないはずのものだった。けれど、それよりもっと、しなければならぬこと。

私はここで、夏と向かい合わなければならぬ。夏と、話さなければならなかった。

「それって、嘘をついたこと……許してくれるの？」

躊躇って、それでも夏は、小さく頷いてくれた。

「あたしを、認めてくれるの？」

「ああ」

そう言って、もう一度同じように、頷いた。

「ありがとう。夏、本当にありがとう。……でも、どうして？」

「椿、と、さっき屋上で会って、」

「椿？」

それから夏は、椿に言われたということ話を話してくれた。「男と女のケンカってあんな感じなのかな。まさに修羅場ってやつだった

よ。何せ椿がすげー恐くて」と、夏は振り返り、怯えるような顔をしてみせた。

「双子って、そういうものなのかよ。俺、殺されるかと思った」

夏があまりに真剣にそう言うから、思わず、笑ってしまう。

「笑うな。本気だぞ、あいつは」

「確かに椿は、あたしのことも好きだけど……」

「も？」

「だけどね、椿は、夏のことが好きなんだよ」

夏は「え？」と小さく呟いて、口を開けたまま放心した。

「椿はね、1年前、夏のこと好きだったの。あの罰ゲームの告白も、椿にとっては本気だった。あのころ、夏と椿は、両想いだったんだよ」

夏も椿が好きだったと知ったときから、ずっと、言わないでおうと思っていた。夏が今さらそれを知って、もしかしたら椿への想いを再燃させてしまうんじゃないかと、私は私で、不安を抱いていたから。

だけどそれでは、いつまでたっても夏に、恋に対して、臆病でしかいられないから。

「椿ね、言ってたの。『たとえこれから好きな人ができても、夏のことはずっと大切に想ってる。恋してたときよりももっと、ずっと強い感情かもしれない』って」

さらに椿はこう言った。大好きな2人が幸せになってくれれば嬉しい、と。

椿が私に力をくれた。私をいつも見守っていてくれた。

だから、私だって強くなる。

「だから夏。あたしが夢見てたこと。もし叶うなら、あたしは、夏のそばに、ずっといたい。夏があたしを許してくれて、認めてくれ

たなら、これからも一緒にいさせて」

＊ ＊ ＊

「桜、おはよ」

「おはよう乃李」

「椿は元気？」

「うん。もうクラスに馴染んでるみたい。さすがだよ」

「何言ってるの。桜だって、すっかりうちのクラスの一員じゃない」

「おはよ」

「あつ、夏。おはよう!!」

「おはよう、桜」

夏が私の告白にどんな答えをしたかは、2人だけの秘密。だから、椿にも教えない。

だけど、私は今も、椿の学校に通っている。

今度は、弥代桜として。

【END】

52 桜咲く夏（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1132c/>

桜サク夏

2010年10月8日13時12分発行